

細胞診専門医会 会報



No.59
June 2023

目次

公益社団法人日本臨床細胞学会理事長挨拶	佐藤 之俊 ● 2
第 63 回日本臨床細胞学会総会（春期大会）を終えて	岡本 愛光・竹中 将貴 ● 3
第 61 回日本臨床細胞学会秋期大会を終えて	伊藤 潔 ● 5
第 64 回日本臨床細胞学会総会（春期大会）の会長を拜命してのご挨拶	藤井多久磨 ● 7
第 62 回日本臨床細胞学会秋期大会の開催にあたって	横山 正俊 ● 9
日本臨床細胞学会 学会賞を受賞して～鮮やかな記憶をたどって～	川本 雅司 ● 10
＜地方会便り＞	
広島県臨床細胞学会からの近況報告	有廣 光司 ● 12
＜細胞検査士会便り＞	
第 82 回細胞検査士教育セミナーを終えて	原田 仁稔 ● 15
2022 年度細胞診専門医資格認定試験を終えて	近内 勝幸 ● 17
2022 年度第 55 回細胞検査士資格試験を終えて	都築 豊徳 ● 18
＜細胞診専門医の輪—先輩・同輩・後輩＞	
細胞診を通していただいたご縁に感謝！	竹原 和宏 ● 19
＜細胞診専門医・指導医駆け出しの頃—青春を語る＞	
細胞診へのあこがれ	佐々木 寛 ● 21
＜国際交流＞	
第 19 回日韓細胞診合同会議（The 19 th Korea-Japan Joint Meeting）が 3 年ぶりに開催	佐藤 之俊 ● 23
カンボジア医療交流 2022 年度活動報告	若狭 朋子・他 ● 24
＜新専門医紹介＞	
2021 年度細胞診専門医試験に合格しました	吉浜 智子 ● 27
新専門医となって	牧嶋かれん ● 28
2021 年度細胞診専門医試験を受験して	丸山 智 ● 29
2023 年度細胞診専門医資格更新について	植田 政嗣 ● 30
2023 年度細胞検査士資格更新申請について	井上 健 ● 31
日本臨床細胞学会 細胞診専門医会総会議事録	
細胞診専門医会 総務・各種構成委員会メンバー	
細胞検査士指導要領	
公益社団法人日本臨床細胞学会細胞診専門医会規約	
編集後記	

公益社団法人日本臨床細胞学会理事長挨拶

公益社団法人日本臨床細胞学会理事長
(北里大学医学部呼吸器外科学)

佐藤 之俊



公益社団法人日本臨床細胞学会理事長の二期目を拝命しております佐藤之俊です。2023年2月現在の状況では、新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが5類に変更されるという方針ですが、感染の完全な終息が見えず細胞診専門医会の皆様も苦労が絶

えないことと推察申し上げます。

私は日本臨床細胞学会理事長の任期4年間の終了を前に、この間の足跡を振り返ってみました。一昨年ですが理事長二期目にあたり、私は以下3つの目標を掲げました。それは、①医療の現場を支えること、②積極的な研究活動の支援を行うこと、そして③細胞診に関する情報を発信することでした。まず①についてですが、新型コロナ感染拡大という状況の中においても、細胞診業務は途切れることなく継続され、医療現場を支えてきたと思います。また、②については、各種研究助成の成果や学会主導の研究成果が得られ、とくに「がんゲノム診療における細胞診検体の取扱い指針」は、日本語に加え英語論文として発信ができました。さらに、③については、日韓やジョーンズホプキンス大学等との国際的交流を再開することができたこと、国際細胞学会でのコンパニオン講演を企画実行することができたこと、さらには細胞診ガイドライン補遺版をWEB公開することができました。このように、細胞診専門医の皆様の多大なるご協力とご支援によって、新型コロナ感染にも関わらず、学術団体あるいは専門職集団としてその活動が維持・発展できたことを心から感謝申し上げます。

さて、2022年はご存知のようにロシアのウクライナ侵攻

をきっかけとして国際情勢、経済情勢が大きく変化しました。これも2021年度に続いて本専門医会として経験のない事態でしたが、学術集会のハイブリッド形式にも慣れ、第63回日本臨床細胞学会総会春期大会と第61回日本臨床細胞学会秋期大会も現地開催とオンデマンド開催のハイブリッド形式にて行われました。専門医会も現地参加とWeb開催という形をとりました。また、今年度も細胞診専門医試験はコロナ感染対策として、検鏡試験はバーチャルスライドに変更して行いましたが、混乱なく実施できました。これらは担当された専門医をはじめとして委員の皆様のご尽力のおかげで行うことができました。この専門医試験でもわかるように、医療におけるDX（デジタルトランスフォーメーション）が急速に進んでいます。本学会でもこの潮流を看過できませんので、「デジタルサイロロジー・AI検討ワーキンググループ」を立ち上げ、検討を開始しました。

今年は日本臨床細胞学会の公益法人化10年を迎える年です。この公益法人化のプロセスを振り返るとともに、その経緯や行程を正確かつ詳細に記録し、今後のさらなる発展に寄与すること、そして、本学会の公益活動を広く国民に発信すること、という目的で、「日本臨床細胞学会公益法人化10周年記念事業」を企画しスタートしました。この10周年記念事業は次の3つの柱からなります。それは、①10周年記念講演会の開催、②10周年記念誌の編纂、③10周年記念の広報活動、です。専門医会の皆様にも本事業へのご協力を宜しくお願い申し上げます。

この会報がお手元に届く頃には新型コロナ感染も落ち着き、学術活動や診療活動がコロナ以前に戻りつつあることを期待しています。末筆ではありますが、細胞診専門医会会員の皆様の益々のご活躍を心より祈念申し上げます。

第 63 回日本臨床細胞学会総会（春期大会）を終えて

第 63 回日本臨床細胞学会総会（春期大会） 会長
（東京慈恵会医科大学産婦人科学講座）

岡本 愛光

第 63 回日本臨床細胞学会総会（春期大会） 実行委員長
（東京慈恵会医科大学産婦人科学講座）

竹中 将貴



2022年6月10日（金）から12日（日）にグランドプリンスホテル新高輪国際館パミールにおいて、第63回日本臨床細胞学会総会（春期大会）（第63回春期大会）を開催させて頂きました。また、2022年6月15日から7月10日には、現地参加ができなかったオンデマンド配信期間を設けさせて頂きました。慈恵医大産婦人科が担当させて頂いたのは、2008年第49回春期大会の安田允先生、2012年第53回春期大会の佐々木寛先生に継ぎ、私で3回目となりました。多くの方々のご協力により、全プログラムを滞りなく終えることができ安堵しております。この場をお借りして心から御礼申し上げます。

第63回春期大会のテーマは、「Rapidly Advancing Cytology: Harmonizing Current Standards and New Technology」とさせて頂きました。この10年間、種々の分野の技術革新は凄まじく、医療分野においてはゲノム診療、AI、自動診断、遠隔医療等の新たな技術の開発が精力的に進められています。細胞診断分野においても、今後このような新技術が導入されることは必然であり、新たな細胞診断の形が確立されていくものと考えられます。一方でいくら技術革新が進んだとしても、やはり全てを新技術に置き換えることは困難と考えられ、今後はこれまでに時間をかけて確立された標準方法や伝統的に受け継がれてきた知識や技術の優れた点を、新技術と融合させていく作業が必須となっていくと考えられます。大会のテーマに沿った充実したプログラムを用意するために、コアプログラム委員会では臓器別小グループに加え、臓器横断的な‘New technology’の小グループを設置致しました。そのため従来のような臓器別のセッションのみならず、臓器横断的な‘New technology’分野でのシンポジウムやワークショップも多数組み込むことができました。プログラム作成に携わっていただきました、全国のコアプログラム委員およびプログラム委員の先生には大変ご苦

勞をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

第63回春期大会はコロナ禍での開催となりましたが、新型コロナウイルス第6波が2022年3月下旬に収束し、第7波が2022年7月上旬に到来しましたので、幸運なことに感染状況がちょうど落ち着いている時期に開催することが出来ました。しかしながら新型コロナウイルス蔓延以降、学会の開催形式は現地開催とオンデマンド開催によるハイブリッド開催が標準形式として定着しつつありましたので、第63回春期大会もハイブリッド形式の開催とすべく準備を進めて参りました。また、オンラインで参加をして頂いた方にも会場の雰囲気やライブ感を味わって頂きたいと考え、チャレンジな試みではありましたがシンポジウムやワークショップを中心にLIVE配信をさせて頂き、チャットまたは音声でリアルタイムに質疑応答ができるシステムを整えて参りました。

参加者数に関してご報告致します。全参加登録者数は現地開催・オンラインを合わせて7,452名の方にご登録頂きました。現地会場来場者数は2日間で延べ3,060名でした。第63回春期大会の新たな試みの一つでありました、LIVE配信を視聴された述べ人数は6,908名でした（現地開催期間のみ）。また、オンデマンド配信期間を含めた全期間における総ログイン回数は37,414回で、総ページ閲覧数は97,070回でした。お忙しい中大変多くの方々に参加登録を頂き、心から感謝申し上げます。LIVE配信に関しては大変多くの方にお褒めの言葉を頂きました。延べ人数約7千名のLIVE配信視聴は、我々の当初の予想を大きく上回る数字で、リアルタイムに最新の情報を得たいと考えている方が大変多いことを痛感致しました。また、ハイブリッド開催が標準となりつつある昨今ですが、学会会場のピリッとした雰囲気やリアルタイムでの議論は、学会に求められている重要な要素の一つであることを再認識致しました。

示説演題に関してはご批判もあったかとは存じますが、あえてコロナ禍以前のような発表形式とさせて頂きました。その理由として、若い医師や検査士の方々にはしっかりと人前で発表するという経験を積んで頂きたい、という思いがありました。自分自身のことを考えましても、学会デビュー当初は示説演題を通して発表の経験を積んで参りましたので、第63回春期大会ではそのような機会を是非とも提供させて頂きたいと以前より考えておりました。おかげさまで 現地開

催期間中の示説会場は、コロナ以前のような活気を取り戻し活発な議論が交わされていました。そのような光景を見ると、1日でも早く新型コロナウイルス感染症の蔓延が収束して多くの方々に現地にお越し頂き、学会独特の雰囲気を肌で感じて頂きたいと願わずにはいられませんでした。また第63回春期大会では、「子宮頸がん予防 HPV ワクチンのホントのところ！」と題しまして、新型コロナウイルス感染症蔓延以降中止されておりました市民公開講座も形式を変えて開催させて頂きました。市民の方々に会場にお越し頂いて講演をお聞き頂くのは難しい状況でしたので、YouTube ライブを利用したリアルタイム配信と、その後の YouTube での期間限定配信という形式と致しました。総閲覧回数は約 2000 回におよび、コロナ禍以前よりも多くの市民の方々にご視聴頂くことができました。こちらも第63回春期大会の中のチャレンジな試みの一つでありましたが、成功裏に終えることができましたと考えております。市民公開講座でご講演頂きました先生に深く御礼申し上げます。

第63回春期大会を開催させて頂いて1つ心残りだったのは、現地参加をして頂いた方々に従来のような懇親会の場を提供できなかったことです。懇親会は現地参加される方々に学会を最大限に楽しんで頂くための重要なイベントであり、主催校が提供できるおもてなしの場でもあります。開催前の

数ヶ月間、なんとか以前のような懇親会を開催できないか、日々感染の状況を注視しながらその可能性を模索しておりましたが、以前のような懇親会が開催できるレベルまでの感染収束はみられなかったため、仕方なく通常形式での開催は断念することとしました。しかし何も開催しないのは「おもてなし」を重要視する慈恵医大産婦人科のポリシーに反するというので、「エンターテイメントプログラム」という新たなイベントを企画させて頂きました。会場では適切な距離をとった着席スタイルで約1時間のアトラクションをお楽しみ頂き、帰り際に飲料（東京地ビール・東京地酒・ソフトドリンク）、お弁当（2種類から選択）、スイーツ（東京の各種名店から取り寄せたもの）をお土産としてお持ち帰り頂きました。例年懇親会は参加費をお支払頂いてご参加頂いておりましたが、従来の開催形式ではなかったため参加費は頂かずにご参加頂きました。例年とは異なり、参加者間のコミュニケーションなどは難しい状況でしたのでご満足頂けたかどうか不安ではありますが、コロナ禍での開催における慈恵医大産婦人科としての最大限のおもてなしをさせて頂きました。

最後に改めまして、第63回春期大会の開催にご協力いただきました方々に深く御礼申し上げます。今後の日本臨床細胞学会の更なる発展を祈念するとともに、引き続き微力ながら学会運営のお役に立てればと考えております。

第61回日本臨床細胞学会秋期大会を終えて

第61回日本臨床細胞学会秋期大会 会長
(東北大学災害科学国際研究所災害産婦人科学分野 教授)

伊藤 潔



第61回日本臨床細胞学会秋期大会を、2022年11月5日、6日の二日間にわたり、仙台サンプラザホール・ホテルおよびガーデンパレス仙台的の2会場で開催しました。東北地区での開催は、15年ぶりでした。副会長は笹野公伸先生（東北大学病理診断学分野）、藤島史喜先生（東北大学病院がんセンター）、八重樫伸生先生（東北大学産婦人科学分野）に、事務局長は三木康宏先生（東北大学災害産婦人科学分野）に、ご担当いただきました。

ハイブリッド（WEBおよび現地）開催としましたが、2日間での参加人数は、約6,000人（計5,975名）、現地参加者も1,500名以上と賑わいのある学会となりました。ご参加いただきました方々に心より御礼申し上げます。

会場がない？

3年半前に開催が決まり、当初は上記会場およびもう一つの3会場でのタコ足会場を予定しておりました。しかし、ご多分に漏れず、一会場はコロナ禍の影響で閉鎖されてしまい、やむなくコンパクトにまとめて2会場に集約しましたが、ハイブリッド開催であったため、むしろ程よい規模感での「顔が見える」「昭和の匂い漂う」開催とすることができました。

開催できるか？

新型コロナウイルスの拡大と長期化に伴い、果たして現地開催をできるか否かは、ずっと悩まされた課題でした。毎日、事態の推移をみていましたが、いわゆる爆発的感染の第7波が収束しつつあったため、最終的に、秋口に現地開催に踏み切りました。安堵したのも束の間、学会開催の2日前に北朝鮮からのミサイル発射に伴い、早朝にJ-アラートが発動されました。学会の開催運営は実行委員長の島田宗昭先生（東北大学産婦人科学分野）にフル稼働してもらっていましたが、もし会期中にまたアラートがなったらどうするかなど、さらに関係各位との協議に追われました。結局、もろもろの悩みは杞憂に終わり、天気にも恵まれて、2日間を終えることができました。

演者は、座長は、来場できるのか？

プログラムは正副プログラム委員長の横山良仁先生（弘前大学産婦人科教授）、南條博先生（秋田大学附属病院病理診断科教授）を中心としたプログラム委員各位にご尽力いただき、充実したものが出来上がりましたが、果たして演者・座長が無事に来仙してくれるかも悩みの種でした。施設の規定やご本人の体調などで数人の方が事前の申し出でWEB参加となりましたが、当日、大事は起こらず、無事にどの会場も順調に進行できました。

テーマと余話、そしてSDGs

学会のテーマは「細胞診と学際」とし、東日本大震災やコロナを中心とした災害の社会への影響や文理融合を含め、幅広い観点から討議を行えればと考えました。産婦人科関連では、今ホットな話題になっているHPV併用検診、単独検診の可否を中心とした講演、シンポを組み、マイクの取り合いになるほどの活発な質疑応答が行われ、やはり現地の生の討論はいいなと改めて思いました。

会長講演は「災害を、がん検診・細胞診から考える」とし、座長は、旭川市で、小学校1年から中学・高校と同期であった中村直哉先生（東海大学病理診断学教授）に、一生の思い出として、務めてもらいました。

また昨今、学会でもSDGsへの貢献が配慮されていることに鑑み、コンgresバッグはフェアトレードで調達することで、貧困撲滅の観点からSDGsに貢献することとしました。



学会場エントランス

さらに環境配慮の観点から、仙台市がペットボトルをリサイクルする「水平リサイクル」の取り組みの一環として宣伝している「ワケルくん」麦茶をサービスドリンクに採用したところ、仙台市のHPに「水平リサイクルペットボトルの活用事例：第61回日本臨床細胞学会秋期大会」として紹介されました（仙台市環境局HP「ワケルネット」<https://www.gomil00.com/articles/plastic/6047>）。今後は、学会においてもSDGsへの取り組みが進んでいくことを願っております。

終わりに

このような形で、ほとんどの悩みが杞憂に終わり、学会を

無事に開催することが出来ましたのも、ひとつには、宮城県での全国のさきがけとなるがん検診事業が、日本で広く認知され注目されてきたが故と存じます。宮城県でのがん検診およびがん診療を築き上げてこられた多くの先達と、宮城県対がん協会などの関係者の方々に、深く敬意を表させていただきます。また、学会を開催するにあたり、多大なご協力・ご支援をいただきましたプログラム委員、東北臨床細胞学会、宮城県臨床細胞学会、宮城県産婦人科医会、仙台市産婦人科医会、仙台市医師会の方々に、そして何よりも、本会にご参加いただきました会員の皆様方に厚く御礼申し上げます。まことにありがとうございました。



会長講演



閉会式後のスタッフ集合写真

第64回日本臨床細胞学会総会（春期大会）の 会長を拝命してのご挨拶

第64回日本臨床細胞学会総会（春期大会）会長
（藤田医科大学医学部婦人科学講座 教授）

藤井多久磨



この度、第64回日本臨床細胞学会総会（春期大会）の会長を拝命しました藤井多久磨です。どうぞよろしく申し上げます。

世の中が目まぐるしく変化
する時代の中で、細胞から得
られるさまざまな情報、ゲノ
ムの解明、AI技術など細胞
に関わる研究も高速に進化を遂げつつあります。その一方、
臨床の現場ではまだまだ、従来の形態学に基づいた診断は重
要です。先輩たちが築いた細胞診の技術を習得し極めること
は、先輩や、その機会をいただいた患者さんに対する恩返し
となります。また、この匠の技を後進に伝えること、また新
しい技術に応用してもらうことは我々の願いです。細胞診に
熱中し、ワクワクする瞬間を大切にすることで我々は豊かな
気分になれるし、そのことが我々の幸せにつながると思いま
す。そこで、本学術集会のテーマを「細胞でワクワクしよう
—技術を極め、次世代に伝える—」としました。細胞に関わ
る我々がワクワク熱中し、幸せな気分になるよう、そして極
められた匠の技が、次世代に継承されていくこと、さらには

今後開発される新しい技術に応用されることを期待し、その
セッションを設けました。ぜひとも、皆でワクワクしていた
だきたいと思います。

さて、本学会が公益社団法人化されて10年が経過しまし
た。そこで、これを記念し「歴代理事長が語る—日本臨床細
胞学会の未来像」というセッションを設けました。今までの
本学会の道のりとともに、将来のあるべき姿について歴代理
事長の先生方に語っていただきます。

ここ数年間はコロナ禍により海外との交流をすることが難
しい状況が続いていました。本学会では久しぶりにアジア
フォーラムを開催し、諸外国の先生とも交流を深めようと企
画しています。アジアフォーラムでは子宮頸がんのスクリー
ニングにて抽出された異常者をどのように取り扱うのかとい
うテーマで話を進めていきます。諸外国ではHPV検査が主
流となりつつあります。HPV陽性者のトリアージとしての
細胞診の立ち位置をどのようにとらえているのか、また要精
密検査としてのコルポスコピーをどのように使っていくのか
など、今後の日本にとっても重要なテーマと考えており、諸
外国の状況を知るにはとても良い機会と思っています。海外
招請講演としては国際子宮頸部病理・コルポスコピー連合
(IFCPC)の教育委員長であり、ヨーロッパ子宮頸部病理・



愛知県臨床細胞学会総会の集合写真 2023年1月15日

コルポスコピー学会会長，元イギリス子宮頸部病理・コルポスコピー学会会長である Margaret Cruickshank 博士から IFCCP の教育についての取り組みについてご講演を賜ります。

婦人科細胞診の場合，婦人科医師，病理医師，細胞検査士がその業務に携わります。臨床の現場および検査室との情報の共有は細胞診判定において，適切な判定および事故やエラーを防ぐという点でも重要です。そこで，愛知県臨床細胞学会，愛知県産婦人科医会のご協力も得つつ上記関係者にアンケート調査を行い，その問題点を抽出するとともに，どのような改善方法があるのか議論しています。その結果，業種が異なると，使う用語の意味も異なることがわかりましたし，その伝え方も重要であることがわかりました。その結果を愛知県臨床細胞学会からの報告としてプログラムに組み入れました。日常業務における現場でのいろいろな疑問を少しでも解消できたらと期待しています。

世界では民族同士の紛争が発展し，不幸な戦争が続いています。人と人とのコミュニケーションにおいて伝え方はとても重要です。そこで，ジャーナリストの池上彰先生をお招きし，「情報の正しい伝え方・受け取り方」なども含んだご講演をお願いしました。どうぞご期待ください。

そのほか，本学会会員の枠を超え，各分野にて超一流の先

生を多数お招きし，シンポジウム・ワークショップ等で議論をしていただくようなプログラムを組みました。タスクシフトにつきましては，厚生労働省顧問の鈴木康裕先生をお招きし，わが国の考え方についてご講演を賜ります。がんゲノムにつきましては国立がん研究センター理事長の中釜 斉先生および藤田医科大学佐谷先生をお招きし，今後のがん医療についてのご講演を賜ります。

大会の開催日程は 2023 年 6 月 9 日（金曜日）から 11 日（日曜日）の 3 日間で，会場は名古屋国際会議場です。愛知県での開催は春期大会・総会としては 44 年ぶり，秋期大会からは直近では 7 年半ぶりの開催となります。愛知県臨床細胞学会および日本臨床細胞学会東海連合会の皆様のご協力のもとに本大会を主宰させていただけることに対し，心から感謝申し上げます。昨今の社会状況でオンラインでの学会参加も普及してきましたが，本大会では，是非とも現地にて「ワクワク感」を皆で共有したいと思っています。状況が許す限り，皆様のご来場を心よりお待ちしております。愛知県臨床細胞学会・検査士会が作成した「愛知のみどころマップ」をホームページ (<https://www.c-linkage.co.jp/jscc2023/>) で紹介しています。この労作をぜひともご覧いただき，気分はもう愛知でお願いします。それでは皆さまと名古屋でお会いできることを楽しみにしております。

第 62 回日本臨床細胞学会秋期大会の開催にあたって

第 62 回日本臨床細胞学会秋期大会 会長
(佐賀大学産科婦人科)

横山 正俊



このたび、第 62 回日本臨床細胞学会秋期大会を、2023 年 11 月 4 日（土）、5 日（日）の二日間、福岡国際会議場、福岡サンパレスにおいて開催する運びとなりました。九州での日本臨床細胞学会の学術集会開催は、6 年ぶりとなります。

本大会では、メインテーマを「医学の発展と細胞診の今後」としました。細胞診を取り巻く環境は、大きく変わろうとしています。悪性腫瘍においては、precision medicine の概念が導入され、遺伝子パネル検査や MSI 検査、myChoice 診断システムなど遺伝子検査に基づく分子標的薬や免疫チェックポイント製剤の選択、臓器横断的な治療が開始されています。これらに細胞診がどう関わっていくか検討の必要があります。また、検診分野においても子宮頸がん検診の HPV 検査単独法が「有効性評価に基づくガイドライン」で推奨 A になるなど、細胞診の役割は大きく変わろうとしています。本学術集会では、このような医学の発展、変革に細胞診がどう関わっていくべきなのか、細胞診の今後の方向性を議論する場にしたいと思います。細胞診専門医や細胞検査士、またそれら若手会員の教育や、生涯教育の場としての役割も重要と考えます。先端分野だけでなく、基本的な知識を学び日常診療にも役立つような充実したセッションも計画したいと思います。また、新専門医制度との関わりを十分配慮した内容にします。本大会の運営、議論を通して、細胞診のさらなる発展に寄与したいと考えております。

なお、佐賀医科大学および佐賀大学産婦人科時代に細胞診の指導をしていただいた杉森 甫、岩坂 剛両先生ともに、帰らぬ人となってしまいました。杉森先生は、2016 年 7 月に お亡くなりになり、翌 2017 年 2 月に「杉森甫先生を偲ぶ会」を開催しました。また、岩坂剛先生は 2022 年 10 月 4 日に自

宅で倒れられて佐賀大学に救急搬送され、直後に私は駆けつけることができませんでしたが、帰らぬ人となってしまいました。在任中に私が、両先生の弔辞を読むことになるとは思ってもやらないことでした。

岩坂先生との思い出といえば、「受けんば、通らんばい！」という言葉が思い出されます。この言葉は、当時細胞診専門医の受験をためらっていたというか、逃げ回っていた私に、岩坂先生から投げかけられたものです。離島勤務や海外留学のため実際に細胞診をみる機会もほとんどなかった私は、帰国後も身を潜めるようにして触れない様にしていましたが、私の後輩からも専門医を取得する先生が出始めていました。そんな矢先に岩坂先生からこの言葉をかけられたのでした。ついには臨床細胞学会などで他の施設の先生方に、「横山はまだ受験もしていないんだよね」と言われる様になり、流石に重い腰を上げずにはいられなくなりました。その後、本格的に細胞診に取り組み、細胞診診断学セミナーを受講したのですが、婦人科分野の講師の先生からもまだ専門医でなかったことに驚かされてしまいました。何とかその年の専門医試験に合格し、岩坂先生に報告に行くことになりながら「実は自分も逃げ回っていて、杉森先生から同じことを言われてやっと受験したんだよね」と言われ、私も苦笑いすることになりました。

留学のテーマやその後の研究も HPV に関するものであり、以降細胞診はライフワークの一つとなりました。両先生のおかげもあり、本学会を担当することができると考えています。本学会担当が決定した時に、岩坂先生に大変喜んでいただいたことが思い出されます。

本大会の運営に関しましては、本邦での新型コロナウイルス感染症の状況や社会情勢を踏まえて、現地開催と On line 開催を併用したハイブリッド形式を予定しております。会員の皆様に安全・安心かつ充足感をもってご参加いただけるよう開催計画を進めてまいります。是非、多くの会員の皆様にご参加いただきますよう、心よりお願い申し上げます。

日本臨床細胞学会 学会賞を受賞して ～鮮やかな記憶をたどって～

帝京大学医学部客員教授
湘南藤沢徳洲会病院病理診断科 川本 雅司
藤寿会佐藤病院外科



「乾燥標本のため、 観察できません」

医者になりたての頃、線維腺腫と思われた乳腺腫瘍の穿刺吸引細胞診。手ごたえも吸引も完璧だったはずなのに、そんな報告書を受け取った。

すぐに中央検査室（今の日本

医科大学付属病院病理部）に連絡したところ、技師さん（以後30年に亘ってお世話になった渡会泰彦CT）が次のFNAの際に標本固定に立ち会ってくれることになり、採取後処理の要点を会得することができた。思えばそれが細胞診との最初の出会いでした（今も忘れない、鮮烈な記憶です）。ただその後、縁あって病理学教室に大学院生として籍を置いたときに、「細胞1個で何がわかる。組織が大事だ」と半ば洗脳されたまま、細胞診は提出する側に居続けました。それが変わったのは、のちほどお話しします。

自分が胸部外科に入局したのは、一日も早く一人前になりたかったからで、そこでは麻酔科や救命救急センターなど、外科系のローテーションが組まれており、入局半年後に解禁となった初めての外勤一人当直で、開胸心マッサージをこなすまでにはなっていました（1年目の医者にそのレベルを要求する医局や外勤先だったのは、今は昔ですね。だけど今の研修制度は、ちょっと寂しい）。急性虫垂炎の患者さんを診察したあと、「おまえ、アッペのオペしたことあんの？」と外勤先の部長に言われ、「やったことないですけど出来ます」と答えて、めでたく初アッペを執刀したのも1年目。外科認定医制度（今の専門医制度）発足直後だったこともあり、制度を盾に取り（悪智恵が働き）規定の経験（以上）に達するまで、複数の派遣先病院で手術三昧の日々。胃全摘や右半結腸結腸切除術も執刀させてもらい、ローテーションの関係で（仕方なく!）大学に戻り（ここも大きな分かれ道の一つでした。目をかけてくださっていた派遣先の部長からは、「ばかやろー、部長の許可を取ってから返事しますと電話は切るもんだ!」と初めて怒られ、川本はこのまま常勤で骨を埋めるのだろうと思っていた元東大第二外科科長の院長からは、「ここでは月にいくつか新しいことに会おうだろうけど、大学だと1日に1つ出会えるはずだから」と激励してくださった。閑話休題）、大学に戻り付属病院の月間売上（失礼）No.1になるほど、「寝ないでなんぼ」の生活の中、認定医資

格も得て自然と乳がんや肺癌に入れ込んでいったある日、

「Oncology をやるなら、病理の大学院に行ったらどうだ」

と、胸部外科部長に言われ、「今更病理だなんて、自分は用なしか」と少々落胆。しかしながら「じゃあ、大学院に入る前に休暇をもらって、ハレー彗星を見に行こう」と気分転換（したはず）。以後周りの人に、「なんで病理へ？」と聞かれる度に、「ハレー彗星のせい」と答えるように（山岳部の先輩がニュージーランドに留学していたので、そこを訪ねるついでに南半球の星空を楽しみました）。

最敬礼

さて、大学院在籍中の4年間も外科医としての外勤（一つは今も勤務させていただいている東京都荒川区の佐藤病院）に加え、週に一度は気管支鏡の研修をしていて、卒業後には国立がんセンターのローテーションが決まっていました。すると、モチキとはよく言ったもので、卒業直前に米国3ヵ所から留学の声がかり…、大学院で学問に目覚めてしまっていた身として、に加えて、単純に楽しそうだったので、一番条件が悪かったけれど一番面白そうなネブラスカ大学内科に留学することに。語り尽くせない素晴らしい日々の後、やりたい研究の関係もあり、2年で帰国後、病理の助手として留学した関係上、そのまま病理学教室へ。後年、座長兼発表者として日本癌学会の学術集會に参加した際、あろうことか向こうからドタキャンした当のお二人（がんセンターの院長と呼吸器外科部長）が歩いてこられるではないですか。最敬礼してお詫びを申し上げたところ、院長先生から、「結局ここ（癌学会総会）で、それぞれの立場で会えたんだから、良かったんですよ」と声をかけていただいた、あの時のお二人の笑顔。

「面白そうな学会でしょ？」

米国から病理学教室に戻ってすぐ、病院病理の業務があまりにも片手間になっている状況に焦りを感じ、「好きな研究をして遊んでいる場合ではない」と、真面目に!？病理診断に取り組むようになり、外科認定医を取ってから11年後に病理専門医となりました。ただ、当時もまだ、細胞一個で何がわかる洗脳は解けきっていなかったところ、論文を書くから共著者にとのCTさんからの誘いがきっかけで、JSCCに入会。都市センターホールで開催された学会に足を運んでみたら、その華やかさにびっくり。そして、CT、MDが共通の話題で切磋琢磨する雰囲気に見とれていたなら、のちに学術集會長もされた前田昭太郎先生から上のように声をかけていた

だった。そう、洗脳が解けた瞬間だったのかもしれない。

細胞質内小腺腔 ICLs

細胞診指導医の受験資格のこともあり、症例報告を投稿したのが、乳腺線維腺腫に現れたICLs。その論文執筆で熟読した文献の執筆者が土屋眞一先生。その後直接の上司となり、薫陶を賜ることになろうとは、当時は知る由もなく、「僥倖」とはこのようなことを指すと、自分の辞書には記されています。そしてその僥倖はさらに続き…、土屋先生が初代委員長となられた医療安全（小）委員会（MSC）で幹事を仰せつかり、今も外部委員としてJSCCがお世話になっている麻生利勝先生の弁護士事務所にご挨拶に伺う段になり、新宿3丁目の地下鉄から地上に出た瞬間、目の前にいらっしゃったのが田中 昇先生、上野喜三郎先生。その映像は鮮烈でも、自分にとってのスーパースターお二人にどうご挨拶したのか記憶にないのは、感激して気を失ってしまったのかもしれない。MSCは医療者と患者、被検者双方のいわば幸福を目指した委員会で、高い倫理観を備えた委員の方たちに出会うことができました。今も公私にわたりお付き合いをいただいている先生方に、（MSCを離れたので、今は「私事」ばかりのうれしいお付き合いがメイン？）この場を借りて心より感謝申し上げますとともに、故人となられました田中先生、上野先生にも今一度深く御礼申し上げます（田中先生の笑顔、忘れません！ 上野さん！ ゴルフ、ご一緒できなかったのが

残念でなりません！）。

高輪の地で想うこと

こうやって振り返ってみるまでもなく、受賞はたくさんの出会いとご指導によって成り立っていて、ここにお名前をあげきれない一人ひとりの方は、川本は俺、私のおかげで学会賞を取ったと、当然に思っていたきたいと強く思います。

さて、学会賞にふさわしい内容を述べるのが本来のはずが、学術外のことばかりになってしまいました。そう、脱線したままこの稿を閉じようとしているのは、賞をいただいた会場で、何を喋ろうかと考えもまとまらないまま名前が呼ばれるのを待っていた時に浮かんできたイメージのせい、と言わせてください。あの場所は外科医として修練を積んでいた病院から通りを隔てた向かい（当時はまだ建物はなく、ただっ広い駐車場）。オペ直後の管理が一段落したときに、食事に誘ってくださった先輩外科医が待つステーキハウスに向かった自分が通った場所に今こうして座っている、そうだまさにここだ。

都会の夜空の下、外科医以外の何物でもない自分が軽い疲労感とともに歩いている。人生経験は浅いけど、今思えばあいつ、真面目でちょっといいやつだったよな（過去形、笑）。そんなあいつには、あれこれ言わずに、ただ一言（ちょっと優しい口調で）声をかけてやりたい

「おい、学会賞もらったぞ」、と。



東京船員保険病院（現 JCHO 東京高輪病院）に勤務していた頃



現 状

会員数は2022年(令和4年)12月31日現在で名誉会員1名, 功労会員3名, 細胞診専門医71名, 細胞診専門歯科医4名, 細胞検査士207名, 医師会員26名, 歯科医師会員1名, 臨床検査技師6名で, 総数319名です。

歴 史

このたびこの拙文を書くに当たり, 往時の資料を見直してみました。それによると広島地区において1966年(昭和41年)から広島大学医学部第二内科(現在の呼吸器内科)を中心に細胞診に関心を持っている医師や臨床検査技師が集まって『広島細胞診研究会』が発足しました。1968年(昭和43年)8月に『広島細胞診学会』と改称して, 基本的には年1回の学術集会と総会が行われましたが, 1974年(昭和49年)だけはなぜか1月, 4月, 12月に年3回開催されました。その当時は産婦人科開業医の先生方も多数演題を提出されてお

り, 当時の新規診断法としての細胞診に対する期待と細胞診を根付かせ発展させようという意欲が伝わって来ました。

1980年(昭和55年)2月には『広島細胞診学会』の発展的解消により, 『日本臨床細胞学会広島県支部』が誕生しました。更に日本臨床細胞学会の公益社団法人化を受けて2015年(平成27年)3月には現在の『広島県臨床細胞学会』に改称しました。

学会長

1968-1975: 和田 直先生(広島大学医学部 第二内科教授)
1976-1994: 藤原 篤先生(広島大学医学部 産科婦人科教授)
1995-2004: 大濱 紘三先生(広島大学医学部 産科婦人科教授)
2005-2014: 永井 宣隆先生(広島市立安佐市民病院 産科婦人科部長)
2015- : 有廣 光司 (広島大学病院 病理診断科教授)

広島県における細胞検査士の独立した活動は, 1974年(昭和49年)7月に始まった『広島細胞診学会サイトスクリーナー研究部会』に遡り, 多くの指導医が熱心に関与されていました。その後呉地区, 福山地区では『東部地区細胞診同好会』として独自の勉強会が行われていました。そして1985年(昭和60年)に『日本臨床細胞学会広島支部細胞検査士会』と



写真1 広島大学病院病理診断科の全スタッフ

改称され現在の形態に移行しており、2009年（平成21年）に『日本細胞診断学推進協会細胞検査士会広島県支部会』、2013年（平成25年）に『広島県細胞検査士会』と名称は変わりましたが、この間ずっと細胞診専門医とは互いに協力しあって健全な運営がなされています。

学術集会、研修会

広島県臨床細胞学会の学術集会は例年年度末に開催しており、約10題の一般演題、2、3例のスライドカンファレンスと特別講演を企画します。一般演題では若手の細胞検査士や細胞診専門医が初めての学会発表をする登壇門であり、演者の緊張が伝わるなか会場にはみんなで育てようとする温かい空気が満ちています。

細胞診専門医会・細胞検査士会合同講演会を開催しており、最新の話題や細胞診ガイドラインが発刊された時には、各臓器の編集責任者を講師としてお招きし、会員の理解を深めるための活動を行っています。

機関紙

1980年（昭和55年）3月に日本臨床細胞学会広島県支部会報第1号が発刊されました。その時に学会長の藤原 篤先生が『発刊の辞』の中で『広島といえば原爆都市として象徴され、平和の灯が燃え続けており、最近では赤ヘルカーブで燃えている。この会報が我々の心の灯として何時までも赤々と燃え続けてくれることを祈念して赤い表紙を選ばせていただいた』と記されています。地域連携組織の会誌の表紙が鮮やかな赤なのは広島県だけですが、その由来は実に広島らし

い理由でした。細胞診に携わる県内すべての医師および臨床検査技師に対する地道な教育活動と広報が行われ、現在、第41巻に至っています。この間、COVID-19のため学術集会を中止した2020年（令和2年）以外は毎年継続して発刊されています。医学中央雑誌や毎年各道県の地域連携組織で発行される雑誌を見渡してみると、多くの雑誌は28～35巻であり、広島県における活動の歴史の長さを再確認する次第です。

学術集会で発表された演題は原則的に機関誌である広島県臨床細胞学会誌に投稿されます。原稿は2名の役員が査読を行い、厳しく審査され、著者との間で何回かのやり取りを経て受諾されます。この雑誌では、全頁カラー印刷で、臓器の肉眼像の色調や組織像あるいは細胞像の精細な画像にはこだわっていて、高品質の雑誌になったと自負しています。また紆余曲折ありましたが、割と廉価で引き受けてくれる地元の印刷会社に巡り会えたため協賛広告を加えることで1冊当たりの会員の負担は1,000円に抑えています。

日本臨床細胞学会中国四国連合会

1986年（昭和61年）6月、岡山で中国四国各県の支部長会議が開催され、日本臨床細胞学会中国四国連合会が発足しました。そのわずか3ヵ月後の同年9月に第1回学術集会が広島で開催され、日本臨床細胞学会中国四国連合会会報第1号が発刊されたことから、発足当時の諸先輩方の並々ならぬ気概が伝わってきます。連合会事務局は広島大学医学部産科婦人科学教室内に置かれ長く貢献されました。その後の会長と連合会事務局の変遷は下記に示す通りです。



写真2 講習会の一風景。参加者の熱気が伝わってきます

会 長

1986-1994：藤原 篤先生(広島大学医学部 産科婦人科教授)

1995-2005：大濱 紘三先生(広島大学医学部 産科婦人科教授)

2006 : 日浦 昌道先生(国立病院機構 四国がんセンター
婦人科部長)

2007-2012：亀井敏昭先生(山口県立総合医療センター病理科
科長)

2013-2018：関根 浄治先生(島根大学医学部 歯科口腔外科学
教授)

2019- : 有廣 光司 (広島大学病院 病理診断科教授)

第 64 回日本臨床細胞学会秋期大会 (広島 2025 秋)

2025 年 11 月に広島で第 64 回日本臨床細胞学会秋期大会を開催することになりました。広島大学医学部産婦人科教授藤原 篤先生が 1988 年(昭和 63)年 11 月に第 27 回日本臨床細胞学会秋期大会を広島で主催されて以来実に 37 年ぶりの開催であり、多くの会員および学会に関心のある方々のご来広を広島県を挙げて心待ちにしています。学会のテーマはまだ確定していませんが、『細胞』に関わるさまざまな切り口で臨床医、アカデミアおよび産業界の多職種の人々が出会い新たな化学反応が起きることを期待しております。また細

胞診を学ぶ若い人たちが意欲的に参加したくなるようなプログラムを提案したいと思います。幸い 2022 年には長く続いた宮島厳島神社の大鳥居の改修が終わり、2023 年には G7 広島サミットが開催されるために街中の整備が進んでいます。さらに 2025 年には広島駅再開発も完了し、利便性も格段に向上します。加えて学会場のすぐ近くには Jリーグサンフレッチェ広島の新しいホームグラウンドとなるだけではなく、試合が行われない日でもレストランやショッピングが楽しめるサッカースタジアム(スタジアムパーク)が竣工します。何より 11 月の広島は 1 年のうちで晴天の日が多く、暑からず寒からず最も天候の良い時期であり、海の幸や山の幸が旬を迎えるこの季節に、広島で学会が開催されることは大いなる喜びです。

多くの参加者の方々と広島の地でお会いできることを楽しみにしています。

謝辞：このたび広島県での細胞診の沿革を記載するにあたっては、本学会の黎明期からご活躍されてきた藤井恒夫先生と、1969 年(昭和 44 年)8 月に実施された第 2 回細胞検査士認定試験に合格して広島県で第一期細胞検査士になられた上馬場是美氏に貴重な資料を提供していただきました。ここに絶大なる謝意を表します。



写真 3 建設中のサッカースタジアム(スタジアムパーク)。2025 年に広島で第 64 回日本臨床細胞学会秋期大会が開催される頃には、話題のスポットになっていることでしょう

(一財) 慈山会医学研究所附属坪井病院 原田 仁稔



2022年8月22日(月)～9月5日(月)の会期で第82回細胞検査士教育セミナーをWEBで開催させて頂きました。実施委員長という大役を3月に阿部 仁会長から打診があり、昨年と同様にオンラインによるオンデマンド配信による開催なので、プログラムの講師の先生方を決めれば大丈夫だと言われ、6月に還暦を迎え役員として最後の仕事だと思い、自分自身初めてのWEB開催で不安もありましたが、細胞検査士の仲間の応援もあり、引き受けることにしました。前回のセミナーの実施委員長の三宅真司さんからの助言もあり、何とか無事に終了することが出来ました。コロナ感染が第7波に入り、全国で感染者が過去最大の人数更新が騒がれる中、WEB開催で点数も学会同様で25単位取得出来るメリットもあり、2182名という過去最高の受講者に視聴してもらい、実施委員長としてとても嬉しく、私自身良い思い出になりました。細胞検査士教育セミナーは、細胞検査士の生涯教育の一環として、必ず習得しておかなければならない基本的なものから最新の知見までを学べる全国レベルの研修会で、1978年に開催されてから44年目の今回、第82回を迎えました。このような歴史のあるセミナーの実施委員長を拝命したことは大変光栄に思う反面、責任の重大さを感じながら準備を進めました。本セミナーのプログラムは、特別講演1題、教育講演4題、ワークショップ基調講演1題、ワー

クショップ2題、日本臨床細胞学会技師賞記念講演、およびセルフアセスメントで構成しました。講師陣も例年だと関東、関西で2回実施していたので、講師の先生方も東日本、西日本のバランスを考えながら専門医の先生方に講演を快諾して頂き、プログラムを作成することが出来ました。講師の先生方とは、面識がなかったので、事務局よりメールでの連絡方法を進められましたが、メールアドレスが分らず、失礼とは思いましたが、電話での挨拶を行い、手紙による依頼文章を郵送し、メールアドレスの交換が出来ました。また春の学会で一部の先生方に講演の御礼の挨拶が出来たことにより、何とかセミナーの準備が整いました。プログラム構成は、特別講演は、子宮頸がん検診へのHPV検査導入やHPVワクチン定期接種の積極的接種の勧奨再開などが、大きな話題になると予想されていることより、産婦人科専門医でもあり、現在、神奈川県臨床細胞学会会長であります宮城悦子先生に「子宮頸がん予防の未来」と題するご講演をお願いいたしました。今後の検診のあり方など細胞検査士の業務にとってとても興味深い内容でした。教育講演では、細胞学会の中でも特に各分野でご活躍されています4名の専門医の先生方をお願い致しました。口腔領域では、九州大学の藤井慎介先生に実際の細胞像を提示してもらい、改めて口腔細胞診の難しさを学びました。婦人科(柳井広之先生)、呼吸器(南優子先生)、および乳腺(坂谷貴司先生)について、各領域の第一人者である先生方に、最近の知見や新しい分類方法など分かりやすく今回の細胞検査士に必要な知識について講演を頂きました。ワークショップは、「唾液腺細胞診ミラノシステムの実践的診断のポイント」をテーマとし、基調講演と



特別講演の演者 南 優子先生と一緒に記念撮影

して樋口佳代子先生に「唾液腺細胞診ミラノシステムの有用性」と題するご講演を。それに続いて、加藤 拓先生と河原明彦先生にはそれぞれ実際に現場での良性、悪性の症例判定についての説明をして頂きました。また、日本臨床細胞学会技師賞を受賞された松本慎二先生には、中皮腫診断における免疫化学と FISH 法についての中皮腫の形態分析など、ご自身の今までの研究を中心とした鑑別診断をととても分かり易く説明して頂きました。

最後に毎年恒例のセルフアセスメントですが、今回は柿沼廣邦先生、内山 勲先生、および二瓶憲俊先生のご担当で進めて頂きました。毎年、細胞検査士教育セミナーは、専門医の先生方のご協力があって、大変内容の濃いものとなっておりますので、ご参加いただきました皆様方には必ずや知識の

アップデートや今後の業務に役立つものと確信しております。また、セミナーでお世話になった南 優子先生には、1月に福島県細胞検査士会総会での特別講演の講師として郡山まで足を運んで頂きました（写真）。3月には柳井広之先生に福島県臨床細胞学会主催の研修会で WEB による講演をお願いしています。改めて細胞検査士教育セミナーを通じて専門医の先生方と知り合いになれたことに感謝しております。

最後になりますが、ご多忙の中、講演を快くお引き頂きました専門医の先生方、そして多大なご協力を頂きました日本臨床細胞学会事務局の皆様方に心より厚く御礼申し上げます。5月から新型コロナウイルスが5類に引き下げられ、早く日常生活に戻ることを願っております。

2022年度細胞診専門医資格認定試験を終えて

2022年度細胞診専門医資格認定試験実施委員長 近内 勝幸

2022年12月17日に、AP浜松町で細胞診専門医資格認定試験を行いました。今年度は、総合科127名、歯科10名の計137名が受験しました。

コロナウイルス感染症対策として開始したバーチャルスライド（VS）による検鏡試験も3回目となりました。受験生はパソコン（PC）上に用意されたVS標本を自分の時間配分で、何度でも見返すことができます。また、全員に同一の標本を提供可能です。PCの操作に戸惑うことなく検鏡に集中できるように、事前に送付する操作マニュアルを更新し、WEB上と自分のPCで練習可能な環境を提供しました。結果、試験本番でのPCの操作性についてのアンケートでは、「普通」・「扱いやすい」と回答した受験生が95%に上り、検

鏡に集中していただけたと安心しております。

専門医を安定して輩出していくためには、受験生ファーストの姿勢は保ちつつ、試験委員の負担を軽減する必要があると考えています。問題作成のみならず、試験当日の監督業務、試験後の合否判定会議と多岐にわたります。会議時間の短縮等課題に取り組んでいきたいと思います。委員の皆様には感謝とともに、引き続きのご協力をお願いいたします。

細胞検査士の皆様にも感謝申し上げます。試験前日のPCチェック、当日の受付や誘導等委員だけでは運営できません。ありがとうございました。

最後に1点告知させていただきます。2023年度の専門医試験の日程ですが、2024年2月3日に行われる予定です。

2022年度第55回細胞検査士資格試験を終えて

2022年度第55回細胞検査士資格試験試験委員長 都築 豊徳



2022年度第55回細胞検査士資格試験の結果を報告させていただきます。一昨年から続く新型コロナウイルス(COVID-19)感染の中で、感染を管理しつつ安全に本試験が実施することが求められる状況でした。昨年度(2021年度)での経験を生かすことにより、2022年度においても本試験を滞りなく実施できたことは非常に喜ばしい限りでした。試験実施に際しては、十分なソーシャルディスタンスを確保、手指並びに顕微鏡及び机などの機材に対するアルコール消毒実施、受験生並びにスタッフの検温並びに健康チェック実施等を中心に対策を練って参りました。一昨年以来の経験を生かすことにより業者への依存度を減らすことが可能となり、実行費用を軽減することが出来ました。

このような状況下にて、2022年10月29日(土)にCIVI研修センター新大阪東及び新大阪丸ビル別館にて一次試験を実施しました。一次試験は筆記試験と細胞像試験(カラープリントを用いた)が行われました。受験者数643名(志願者638名、欠席者5名)でした。結果ですが、合格者は298名(合格率46.7%)となりました。それに引き続き、2022年12月3日(土)・4日(日)にウインクあいちにて二次試験を実施しました。二次試験受験対象者は474名(内訳：今回の一次

試験合格者298名及び一次免除者176名)でしたが、受験者数472名(2名欠席)でした。二次試験は顕微鏡による検鏡を行うスクリーニング試験(婦人科、呼吸器、消化器、体腔液、尿・その他)、顕微鏡を用いた同定試験を行いました。新型コロナウイルス感染予防の観点から、昨年同様、受験生毎に専用の顕微鏡を固定し、標本を回覧する様式を採用しました。標本損傷の危険性が危惧されましたが、昨年同様、標本の破損事故はありませんでした。また、会場の関係から、一昨年同様、実技試験の実施は見送りとなりました。今回は受験生が昨年度よりも少なく、3日4日ともに午前・午後の2グループで、計4グループ実施しました。結果ですが、合格者は248名(合格率は51.9%)となりました。

安全で経費を削減する試験方法を模索していきたいと考え、2022年度は愛知県名古屋市の名古屋駅前にあるウインクあいちを二次試験会場とて実施となりました。会場が大きくなりましたが、順調に試験が実施できました。関係各位に深く御礼申し上げます。2023年度は名古屋駅近傍の名古屋会議室 プライムセントラルタワー名古屋駅前店での開催となります。ウインクあいちよりも名古屋駅からの距離が少し離れますが、設備が新しく、費用も安くなっております。名古屋会議室 プライムセントラルタワー名古屋駅前店の使用感を検討し、次回以降の開催場所の参考としていきたいと考えております。

これをもって2022年度第55回細胞検査士資格試験の報告とさせていただきます。

細胞診を通していただいたご縁に感謝！

四国がんセンター 婦人科 竹原 和宏



今回松江市立病院大石徹郎先生からのご推薦でこの原稿を認めております。このコーナーのテーマは、“細胞診専門医の輪”とのことで、これまで私が細胞診でお世話になり、ご指導いただいた多くの先生に、記憶の範囲内で感謝の意を伝えたいと思

います。

まず大石徹郎先生とはこれまでも婦人科診療を通じてお付き合いがありましたが、今回の依頼のきっかけとなったのは第60回日本臨床細胞学会秋期大会（鳥取）のプログラム委員会で一緒にお仕事をしたことではないかと思っています。本学術集会は2021年に廣岡保明先生が大会長で開催されましたが、廣岡先生とは、さかのぼること2015年に紀川純三先生が第56回日本臨床細胞学会総会を松江で開催されたときにご紹介いただいたことがきっかけでした。それ以来、専門領域は異なりますが現在まで臨床細胞学会の委員会などで大変お世話になっています。第60回日本臨床細胞学会秋期大会のプログラム委員会は、第1回は米子にて対面で行われましたが、その後コロナ渦に突入し、学会当日までメールでのやり取りでした。そんな中、大石先生には婦人科関連のプログラムを中心的にまとめていただき大変お世話になりました。学会はHybridの形で開催されましたが、私は現地参加しました。久しぶりの対面での学会ができて大変良かったと思っています。

私は昭和63年に広島大学を卒業後、藤原篤先生が主催する産婦人科学教室に入局しました。その年の11月に藤原先生は第27回日本臨床細胞学会秋期大会を主催されましたが、私は運悪く(?)同年夏に関連病院へ出向しましたので、学会当日は病院のお留守番でした。2年後、帰局してからはHPVを精力的に研究されておられた永井宣隆先生の下で、婦人科腫瘍についての勉強を始めました。当時教室内では、「細胞診は婦人科腫瘍を志す婦人科医のお作法の一つ」として、外来、病棟で実施された細胞診を婦人科腫瘍グループメンバーで分担して鏡検し、週1回のカンファレンスで細胞検査士の上馬場是美さんのコメントを聞きながら永井先生と最終診断をするという作業を行っており、その中で細胞診を勉強させてもらいました。顕微鏡をのぞく習慣のなかった臨床医が尻を叩かれながら行うduty workでしたが、思い返せ

ば細胞診や婦人科病理を勉強する大変良い機会に恵まれたと思います。その影響もあり、私の最初の全国学会デビューは1991年の第32回日本臨床細胞学会で、「子宮内膜細胞診にて転移を認めた再発性乳癌の一例」について症例報告をさせていただきました。当時、多くの先輩より指導、助言をいただきましたこと、この紙面を借りて感謝を申し上げます。その後1995年に細胞診専門医を取得しました。細胞診専門医の取得前後は、出張先の病院の細胞検査士の皆様と目の前の症例の診断についてディスカッションし、学会発表などを通じて勉強させていただきました。

1999年に呉医療センターに移動してからは藤井恒夫先生の下で婦人科腫瘍の臨床を中心に診療を始めました。当時、藤井先生は東京慈恵医科大学の佐々木寛先生と懇意にされており、共同で臨床試験を実施されておられました。その後、佐々木先生は2013年より日本臨床細胞学会の理事長を務められましたが、藤井先生がご開業されたのちも「子宮体癌根治治療における外側大腿鼠径リンパ節温存による術後下肢リンパ浮腫改善に関する検討」試験などにお誘いいただき、ご指導いただきました。本研究は婦人科手術の術後合併症で問題となる下肢のリンパ浮腫を予防する手技に関する前向き介入研究で、結果次第で婦人科の手術手技が更新されるかもしれません。現在データの解析中とのこと、結果が楽しみです。また当時、呉医療センター臨床研究部長の谷山清己先生（のちの呉医療センター院長）が国立病院機構の共同研究で実施された子宮頸部細胞診の従来の塗抹法と液状細胞診の診断精度を検証する多施設共同研究（CCLBC試験）を立ち上げられ、そこでLBCについて勉強させてもらいました。また、その付随研究として日本人のHPVタイピングについてまとめる機会をいただきました。各施設から集積された多くのデータを解析し、日本ではHPV52, 58型の頻度が多い、といった結果を、2010年Edinburghで開催された17th International Congress of Cytology, 2011年ASCO meetingでポスター発表し、論文化しました。おりしもHPVワクチンが臨床に導入される時期でもあり、たいへんタイムリーな研究であったと思っています。

呉医療センターに異動してしばらくした2002年に、当時の四国がんセンター 婦人科部長の日浦昌道先生より第41回日本臨床細胞学会秋期大会（下関）の「スライドセミナー子宮頸癌」で発表しないか?とご推薦いただいたことがありました。私が症例を提示し、当時三重大学に在籍されていた田畑 務先生（現東京女子医大）が回答するといったセッション

ンでした。私が出題したのは子宮頸部明細胞癌の症例で、大変 rare case であつたにもかかわらず田畑先生は的確に所見の解説し、診断をされました。これがきっかけで現在まで婦人科腫瘍のさまざまな場面で田畑先生にはお世話になっているところです。田畑先生は2025年の第66回日本臨床細胞学会春期大会の大会長を務められるとのこと、学術集会、楽しみにしております。

2013年に四国がんセンターに移動となりました。ちょうどその年の8月に第28回日本臨床細胞学会中国四国連合会総会・学術集会（広島）が永井宣隆先生会長で開催されました。学会は成功裏に終了し、その夜関係者と食事会がありました。最後に永井先生に誘われ、二人で大学病院時代の行きつけの懐かしいスタンドで、遅くまで酒を酌み交わしました。思い返しても、国際学会以外で二人でお酒を飲みながら話したことはありませんでした。多くは大学にいた時の昔話で、あんなことやこんなことがあったなあ、楽しかったなあ、と笑いながら話されていました。永井先生との会話はこれが最後で、2018年に突然の訃報を聞いた時は体が凍りつきました。永井先生の追悼については、細胞診専門医会報 No.55 に平田英司先生が投稿をされていますが、改めてここで心よりのご冥福をお祈り申し上げます。

四国がんセンターに赴任した当時の愛媛県の臨床細胞学会は野河孝充先生が会長をされており、毎年1月には学術集会

が実施されておりました。また、愛媛県生活習慣病予防協会が毎年開催する子宮がん検診従事者講習会がありますが、2015年1月に青木大輔先生が松山でご講演されました。青木先生はHPV併用検診についての研究を愛媛県でも実施されていた様で、講演ではがん検診の Harm と Benefit、HPV検査の導入には本邦での細胞診と比較する疫学研究の結果を正しく評価する必要があることを解説されました。青木先生は2015年に日本臨床細胞学会の理事長にご就任されましたが、日浦先生、野河先生よりいただいたご縁もあり、細胞学会にとどまらず婦人科腫瘍にかかわるさまざまな仕事について多くのご指導をいただくことになりました。今年度で退官されるとのこと、これまでご指導いただきありがとうございました。

思いつくままに筆を進めましたが、細胞診を通してお世話になった先生はまだ多くいたような気がします。細胞診にかかわっていたことで、多くの先生方とのご縁が生まれ、細胞診にとどまらず多方面にわたるご指導をいただき、今の自分があると思います。改めて感謝申し上げます。

私が四国がんセンターに赴任してから小西晴久先生、藤本悦子先生、横山貴紀先生が細胞診専門医を取得され、現在日比野佑美先生が専門医取得に向け、勉強をされています。今後も新しく出会う先生、細胞検査士、後輩の皆様に、より良き縁を届けられればと思っています。

細胞診へのあこがれ

千葉徳洲会病院
東京慈恵会医科大学 客員教授

佐々木 寛



私が指導医の試験を受けて既に47年目です。自分の細胞診専門医番号379番で、さらに少ない番号では欠番がみられ、改めて年を感じるこの頃です。

私が細胞診の魅力に取り付かれたきっかけは、東京慈恵会医科大学医学部6年生の秋

に、天神美夫先生の講義を受けたことであります。50年前には細胞診断学は新しい診断法の一つであり、その頃の産婦人科の教授以下スタッフの多くが、「病理組織診断もしないで腔内の腐った細胞を鏡検して、子宮頸癌、まして異形成や上皮内癌を診断できるわけがない」とおっしゃっていたことを記憶しています。

天神先生のお話は大変面白く、頸癌、特に前癌病変を適確に診断できることを実例をもって示され、細胞診指導医（50年前の細胞診専門医の名称）という専門医試験があることを知ることができました。50年前という専門医の概念はなく、産婦人科では母体保護法指定医だけであったので、大変興味を持ったものです。

1975年に卒業し、医学科外科系大学院に進み、卒業後2年目の秋に細胞診指導医の試験を受けることにしました。50年前は年に2回春と秋に試験があり、論文や学会発表がなくても受験が可能でした。その頃、天神先生は杏雲堂病院の婦人科部長でしたので、天神先生に直に細胞診の指導を受けました。当時大阪市立医大から山下久美夫先生が杏雲堂に出張なさっており、二人で天神先生の「天神の32分類」を教わったものです。天神先生は日本における細胞診診断の権威であり、よもや試験に落ちることなどない、と山下先生と共に思っておりましたが、共に1年目の秋、2年目の春、と2回立て続きに不合格となり、何故か？と山下先生と相談したものです。結果気付いたことは、天神先生は試験を受けずにご自分でその体制を構築されたので、自動的に指導医になられていたことに思い当たりました。

天神先生のもとに勤務されていた慈恵医大の先輩の杉下匡先生（名誉会員）は細胞診指導医で、第1回の試験を受け1回で合格なさっておりました。そこで、山下先生共々二人で杉下先生に試験対策勉強をお願いしたところ、二人とも3回目の試験で合格することができました。残念ながら「天神の32分類」は試験とは全く関係がありませんでした。杉下先

生の御指導のお陰で医学部卒業2年目の秋に指導医試験に合格できたことは今でも懐かしく、杉下先生には大変感謝の気持ちを持っております。

大学院を卒業し、米国ペンシルベニア大学小児病院放射線治療部に留学し、放射線生物学を学び、帰国後淋菌感染症の陰細胞所見の論文を執筆し、日本臨床細胞学会雑誌に掲載され、新指導医となりました。現在と異なり、細胞診指導医数は余り多くなく、新指導医の義務として臨床細胞学会学術集会で、それも第1会場の大勢の会員聴衆を前に、スライドカンファレンスに答える必要がありました。私が当たった症例は異形内膜増殖症で、細胞所見について何を言っていたのか、今にして思えば、訳のわからないことを言っていたな、と懐かしく思い返しております。

慈恵医大産婦人科外来での日常診療では、細胞診検体は細胞検査士さんの診断後すべて産婦人科外来に戻されていたので、毎日毎日鏡検しておりました。ある時、子宮頸部上皮内癌の所見のある検体を見つけ、伊藤治英助教授に早めにお伝えしたところ、「コルポスコープ下生検組織検査もまだしていないので、上皮内癌がわかるはずがない」と一蹴されました。が、後日、伊藤先生から上皮内癌だったと伝えられ、さらにどうしてわかったのか、と質問されたのが印象的で、更なる細胞診の診断向上を目指すことを決意したものです。

私が細胞診指導医になった頃は、婦人科、呼吸器、消化器、全科と個別に受験が可能でした。その頃は呼吸器細胞診を用いて肺癌検診が盛んでしたので、手始めに呼吸器の指導医試験を受験することを目標としました。

私が指導していた株本和美（CT）に癌研の南（CT）を紹介してもらい、2週に1回呼吸器の細胞診検体20枚ほどのスクリーニングと診断トレーニングのために癌研へ伺いました。1年ほど経ったとき、扁平上皮癌と小細胞癌の合併症細胞診検体の診断をしたところ、南CTが「以前の癌研で診断した結果では小細胞癌は合併でない診断になっている」とのことでしたが、診断した私が点付けした細胞を南CTが診て、手術検体の病理組織結果が、扁平上皮癌と小細胞癌の合併であり、以前の診断は不十分だと判明したことがあり、呼吸器細胞診の診断に自信を得たものです。

その勢いで呼吸器指導医試験を受け、無事合格しました。残念だったのは、学会事務局より「先生は既に細胞診専門医なので、合格証も指導医判子も送れません」との通知で、せめて合格証くらいは送ってくれれば、と思ったものです。

がっかりしたので次はFIACの資格を取ることにしまし

た。3年間MIACの後にFIACの受験をいたしました。当時の試験委員長は坂本穆彦先生で、坂本先生がおっしゃるには、「FIACのテストは合格率100%」とのことで驚きました。FIACの受験用のテキストは、厚さ7cmもあるYellow Bookという通称で呼ばれている本で、余りに厚いので枕にしかない、と思うほどの英文の本でした。以前の受験者に過去問を教えてもらい、その問いに沿ってYellow Bookを読んで受験しました。

勉強中に面白いと思ったのがスノーシュー（雪靴）の形の違いで、日本では輪形を考えますが、米国ではスノーシューは菱形で全く違う形をしていて、スノーシューに似た原虫は何か、との問いの正解はアルタネリアでした。日本の輪形だ

とトリコモナスなので、ところ変われば雪靴の形も違うのだとしみじみ思ったものです。

FIACに合格してみると全員合格になっていましたが、どう見ても私の前に座って受験した人の名前がなく、受験したことになっていませんでしたので、これなら100%合格になるな、と妙に納得しました。FIACの試験合格の同期は上坊敏子先生で、今でもゴルフを一緒にする仲です。

現在では、細胞診指導医が細胞診専門医になり、試験は全科のみとなっており、そのためなのか産婦人科医の受験者が減ってきているのが残念です。私が昔感じた細胞診への憧れを、若い産婦人科の先生にはもはや持ってもらえないのか、と少し寂しく思うこの頃です。

第19回日韓細胞診合同会議 (The 19th Korea-Japan Joint Meeting) が3年ぶりに開催

日本側事務局
(北里大学医学部呼吸器外科学) 佐藤 之俊

2022年9月3日(土)に第19回日韓細胞診合同会議がWEB開催されました。この合同会議は2002年秋から開始され、対面で学術的な議論と両国の細胞診関係者の交流を発展させるもので、2022年には第20回を迎える予定でした。しかし、ご存じのように新型コロナウイルスパンデミック感染のため3年ぶりの開催となりました。当初は韓国で現地参加開催の予定でしたが、新型コロナウイルス感染や国際社会の状況を鑑み残念ながらWEB開催になりました。そのため、日本と韓国の両国から2名ずつの演者が講演するシンポジウムの形式で行われ、例年行われているポスタープレゼンテーションはありませんでした。(図)。

具体的な内容ですが、今回の日韓細胞診合同会議も例年通り、韓国細胞病理学会秋期大会の中のInternational sessionとして開催されました。日本からの参加登録者は事務局を含め35名でした。日韓両国の細胞学会理事長の挨拶に始まり、

合計4講演が行われました。日本の演者は矢納研二先生と廣島健三先生の2名で、演題名はそれぞれ「Evolution of endometrial cytology procedures in the past 20 years」と「Cytology Reporting System for Lung Cancer: Proposal from the Japan Lung Cancer Society and Japanese Society of Clinical Cytology」でした(表)。この表に示すように、両国からアクティビティ溢れる演者の先生方が、内容も日常診療の総括から最新の技術までご講演下さり、モニター越しとはいえ熱意と活気を感じられる有意義な会議でした。

次回はいよいよ第20回を迎えます。2023年9月2日に群山のGunsan Saemangeum Convention Centerにて開催予定です。是非記念すべき20回目に現地参加し、両国細胞診の友好と学術的交流を深めていきたいと思っております。専門医の皆様のご参加ならびにご支援をお願い申し上げます。

表 第19回日韓細胞診合同会議プログラム

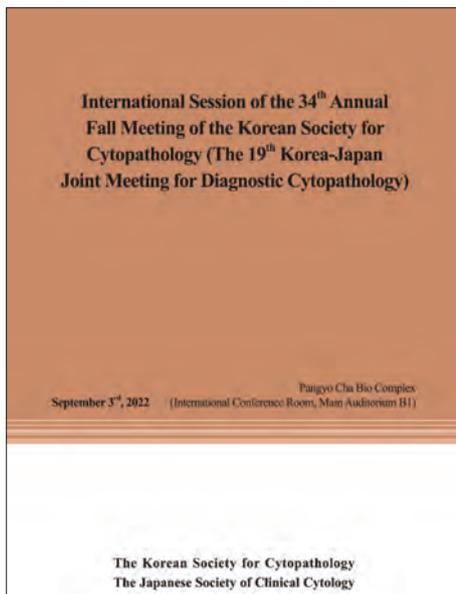


図 プログラム集表紙

International Session of the 34 th Annual Fall Meeting of the Korean Society for Cytopathology (The 19 th Korea-Japan Joint Meeting for Diagnostic Cytopathology)		
10:20 - 10:30	Opening remark	Prof. Gyungyub GONG (President, KSC) Prof. Yukitoshi SATOH (President, JSCC)
10:30 - 12:40	Symposium	Chairs: Prof. Jee Yeon KIM Prof. Atsuhiko SAKAMOTO
10:30 - 11:00	Application of Proteomics in Cytopathology	Prof. Han Suk RYU (Department of Pathology, Seoul National University Hospital, Seoul, Korea)
11:00 - 11:30	Evolution of endometrial cytology procedures in the past 20 years	Prof. Kenji YANO (Department of Obstetrics and Gynecology, JA Suzuka Hospital, Mie, Japan)
11:30 - 12:00	Application of Artificial Intelligence in Cytopathology	Prof. Yosep CHONG (Department of Pathology, The Catholic University of Korea Uijeongbu St. Mary's Hospital, Uijeongbu, Korea)
12:30 - 12:30	Cytology Reporting System for Lung Cancer: Proposal from the Japan Lung Cancer Society and Japanese Society of Clinical Cytology	Prof. Kenzo HIROSHIMA (Department of Biochemistry and Genetics, Chiba University Graduate School of Medicine, Chiba, Japan)
12:30 - 12:40	Closing remark	Prof. Seung-Sook LEE (Vice president, KSC) Prof. Kiyomi TANIYAMA

近畿大学奈良病院 病理診断科 若狭 朋子
戸田中央病理診断科クリニック 河合 俊明
大森赤十字病院 坂本 穆彦

日本産科婦人科学会の国際交流事業として、2015年よりJICA 草の根技術協力事業であるカンボジアにおける子宮頸がんを通じた女性のヘルスケア向上プロジェクトが始まりました。がん検診の結果を適切に治療に結び付け、適切な治療を行うためには細胞診および病理組織診断が適切に行われなくてはなりません。産婦人科医への技術支援と平行する形で、2017年から厚労省の医療技術等国際展開推進事業として国立国際医療研究センターが行っているカンボジアの病理医、病理技師の人材育成事業に参加しています。2022年度の活動をご報告します。

病理専攻医の招聘

世界的な COVID-19 の流行がつづいていますが、2022年春からは日本も短期商用ビザでの入国が可能となりました。2022年4月の段階では、カンボジアから来日するためには、来日 72 時間前の PCR 陰性証明と日本で認可されたワクチンの3回接種、もしくは日本入国後7日の自主隔離、もしくは日本入国3日後に PCR 陰性証明を得ることが求められてい

ました。カンボジアでは最初の2回は全ての方が中国製ワクチンを接種しておりました。その後、ファイザー製やアストラゼネカ製が入手できるようになり、4月の時点では医療従事者は2回の中国製ワクチンに加えてファイザーもしくはアストラゼネカのワクチンを2回の合計4回の接種が終了したところでした。日本入国時に関しては、2回のワクチン接種しか終了していない計算になり、日本で1週間研修するだけでも、隔離検疫にさらに1週間かかる計算です。いくら時間に融通の利く病理とはいえ、2週間も病院を空けることは常勤職員にはできません。しかし、専攻医はカンボジアでは大学に所属する学生扱いなので2週間以上の出張が許されるということが分かりました。

そこで神戸東ロータリークラブの皆様のご支援をいただき、神戸国際医療交流財団の松本安代先生のご指導の下、カンボジアの専攻医2期生6名を神戸で開催されました第111回日本病理学会総会に合わせて日本に招聘しました。

自主隔離の時間も無駄にしないように、しっかりホテルで研修してもらうことにしました。細胞診は顕微鏡と標本があ



自主隔離中のホテルの一室でも細胞像の解説、指導を行いました。
レンタルした顕微鏡をノートパソコンに接続して一同で細胞像を見られるようにしてくれました。

れば勉強できます。このために、2名に1台ですが、実習用の顕微鏡をレンタルして自主隔離のホテルに用意しました。そして子宮頸部細胞診を主体に自習してもらいました。細胞診の教材は近畿大学だけではとても準備できませんでした。そこで森ノ宮医療大学、畿央大学、埼玉医科大学そして東京こころからだの元氣プラザと4カ所から、実習用の標本をお借りしました。標本を渡しますと、専攻医は3日間、交代しながら一日中標本をみて勉強していました。実習用の顕微鏡ではありますが、きれいな染色の典型例を体験することができて非常に勉強になったようです。個々の質問に対して1回はwebで、さらに、ホテルへ私が出張して対面(?)での指導を2回行いました。

今回はロータリークラブのご厚意で、撮影装置のついた顕微鏡を3台借りることができました。多少予算オーバーではあったのですが、これが大当たりでした。カンボジアの若い先生たちは、さすがwebに強く、あっという間に撮影装置の機種を検索してwebからアプリをダウンロードし、撮影装置を通して、顕微鏡画像をPCの画面で閲覧できるようにセッティングしてくれました。手作業での調整が必要でしたが、顕微鏡の画面を、みんなで同時に見られるようにしてくれたおかげで、日本の大学の実習室で行うのと同じレベルの解説講義ができました。カンボジアの専攻医の皆様の熱意とたくましさに感服いたしました。

この自主隔離期間を経たのちに、6名は神戸で開催されま

した第111回日本病理学会総会に参加し、さらに神戸大学医学系研究科診断病理学教室の伊藤智雄先生の教室で1週間、研修させていただきました。ロータリークラブ、神戸大学の諸先生方に深く感謝いたします。

渡航再開と現地での講義再開

カンボジアでは病理学の教員は1名しかおりません。当然、全分野を講義することはできない、ということで、1期生の時から、ドイツ、シンガポールの先生方と協力して専攻医への講義を援助しています。2期生に対しては渡航制限があり、ほとんどがオンラインでの講義になっておりました。

夏ごろから渡航しての講義を模索しておりましたが、感染拡大もありなかなかありませんでした。2022年8月には獨協医科大学埼玉医療センターの伴慎一先生に胃、消化管を、東京都立小児総合医療センターの松岡健太郎先生には小児病理を講義いただきましたがいずれもオンラインでの講義となってしまいました。

しかし2023年2月になって、ようやく、日本からの渡航を再開することができました。坂本穆彦、河合俊明の2名が国立国際医療研究センターの先生方とともに、カンボジアに渡航しました。

現地ではカンボジアで専門医教育を所管しているUniversity of Health Sciences(UHS)の医学部長のProfessor Bouchan Youttiroung、病理学教授 Dr. VathanaそしてUHS



久々のカンボジア訪問。前列は専攻医3期生。後列右から2番目が1期生のチャンコン医師

Technical School of Medical Care (TSMC: 検査技師養成コース) の director である Dr. Tann Ngy とこの3年間の活動状況と、これからの教育について議論しました。日本より、カンボジアの死因および罹患率を統計学的に処理して、現在および近未来的に、頻度の高い疾患について講義をする方が、いいのではないかと発言したところ、皆の賛同を得ました。

その後、これまで我々が設立に協力してきた母子健康センター (NMCHC) とプノンベンのがんセンターである Khmer-Soviet Hospital (KSFH)、そして Kossamak Hospital を訪問しました。NMCHC では consultation のなかに胸膜生検があり、それも適切な免疫組織化学を施行してあったので、吃驚しました。交流が途絶えていた3年間においてもカンボジアの病理医、病理検査技師が着実に免疫染色の技術を勉強していたことを嬉しく思いました。しかし、いずれの病院においても検査室においては固定が不十分 (古いホルマリン、少ないホルマリン) であるものが見受けられ、改善するように指導しました。基本の HE 標本作製についてはまだまだ改善の余地があるように思われます。

UHS においては病理専攻医3期生に対して、河合が肺腫瘍性疾患と肺非腫瘍性疾患の講義を、坂本が内分泌病理と子宮頸部 (組織、細胞診) の講義を行いました。講義には3期生のみならず、今は立派になった1期生の Dr. Chan Kong と Calmet Hospital の Dr. Mary および Dr. Pintuna、更に Khmer-Soviet Hospital の Dr. Vitou も出席してくれました。皆熱心に傾聴しており、質問も多数見受けられました。

2023年度への抱負

この2期生6名は、帰国後、フランス語の語学試験に合格

して6人全員が研修プログラムの一環として2022年10月から1年間フランスで研修できることになりました。フランスでの研修の枠は、内科、外科などと一緒にですので、フランス語が十分にできないと採用されません。1期生は語学試験にかなり苦勞しておりましたが、2期生の6名は、ほとんど何の支障もなくフランス語の語学試験をパスしたことから、この6名は同学年の中でもかなり優秀な人材であると思われます。カンボジアにおいては臨床各科の中でも病理がかなりの人気であることがうかがえます。

今後はカンボジア人病理医だけで専門医教育が行えるように支援していきたいと考えております。このためには、大学の教員の育成を進めなくてはなりません。カンボジア国内には博士課程、大学院がありません。大学教員となるにはフランスなど外国へ行って博士を取得する必要があるのです。博士課程はどんなにスムーズに行っても4年かかります。長期間になることからしっかりした奨学金、そして生活の援助が必要です。なんとか今回の2期生の6名から日本で博士取得を目指す人材が出てくれることを期待し、調整していきたいと考えております。

2023年1月からは3期生への病理講義が始まります。コロナの状況が許せばですが、なんとか渡航して対面での講義ができればと考えています。

カンボジアの病理診断、細胞診断が発展し、カンボジアの人々が適切な病理診断サービス、がん治療を受けられるようになりますよう、これからも日本臨床細胞学会の諸先生方のご支援、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。



このたび2021年度細胞診専門医試験に合格することができ、専門医会会報に寄稿させて頂く機会を頂戴しましたことを感謝申し上げます。

私が初めて細胞診と出会ったのは、2009年に大学を卒業し初期臨床研修医として働き始めた静岡赤十字病院で、産婦人科をローテーション中

のことでした。「スミアカンファレンス」と銘打たれたカンファレンスに参加し、当時は不勉強で細胞診の見方を全く知らなかった私は、「所見を聞かれたら、とりあえずまずは背景を言って、次に核の所見、その次に…」とお粗末なあんちょこを作り、何とかやり過ごすという状況でした。しかしそのローテーション中に婦人科癌の患者さんの診療にあたり、それがきっかけで婦人科腫瘍の道を志しました。

2011年4月に母校の慶應大の産婦人科学教室に入局して、いよいよ産婦人科として後期研修を開始したところ、またしても「スミアカンファレンス」の壁が目の前に立ちはだかりました。出題者の先生が用意したスライドを事前に検鏡して回答し、毎週水曜日朝7時40分から議論・解説を行うというものでしたが、当時フレッシュマンであった私は7時30分までに回診とカルテ記載を終え、その後カンファレンスルームを準備し…とバタバタで、カンファレンスが始まる頃には毎回眠気に襲われていました。しかしそこで青木大輔教授をはじめ諸先輩方の中で活発に行われる議論を聞きながら、婦人科腫瘍を志す者にとって「細胞診は当然身につけていくべきたしなみである」という事をひしひしと感じ、細胞診所見をすらすらと呪文のように答える先生方に憧れの念を抱きました。

それから数年、無事に研修を終え産婦人科専門医を取得し、2015年に大学院に進学しました。研究を行う傍らで2児の母にもなり、目まぐるしく毎日を過ごすうちに細胞診の勉強が後回しになっていました。一方で同僚の先生が次々と細胞

診専門医を取得していき、ひそかに焦りを感じていました。

無事に大学院を卒業し、臨床に戻ったのですが、ある日組織診ではどうしてもつかまらないのに子宮頸部細胞診にて毎回 other malignancy が出てしまう症例に出くわしました。その際に病理部まで行って病理の先生と一緒に顕微鏡を覗いているうちに、やはり腰を据えて細胞診を勉強したい！ という気持ちが強くなりました。

そこで、2021年に慶應大学病院にて婦人科腫瘍専門医の修練を本格的に開始すると同時に、平行して細胞診専門医の取得を目指すことにしました。最初はスライドを見てもテキストを読んでもちんぷんかんぷんで、「高い受験料を払って、受験できるレベルにすら達しなかったらどうしよう…」と途方に暮れていましたが、岩田 卓先生に特別レクチャーを開催して頂き、病理部に置いてある勉強用スライドを見るために何度も通い、イエローページの過去問も正答率が少しずつ上がっていきました。また一緒に受験をする後輩と「これは扁平上皮癌？ 腺癌？」と夜遅くまで語り合いました。

試験前日に夫が緊急入院するというアクシデントもありましたが、無事に受験会場にたどり着くことができ、後輩と共に合格の知らせを頂いた時には、ほっと胸をなでおろしました。

今回細胞診専門医の勉強を通じて、診療科の垣根を越えて網羅的・系統的に細胞診を学んだことは、自分にとって大きな自信につながりました。これまでご指導下さった先生方、叱咤激励下さった先生方に心から感謝申し上げます。2022年日本臨床細胞学会総会春期大会においては、シンポジウム「進行卵巣癌治療選択における体腔液由来検体の細胞診断と遺伝学的検査の役割～現状と展望～」にて発表する機会も頂き、ますます細胞診への興味が増えています。

今後も婦人科腫瘍の鍛錬を続けていく中で、自分で採取した細胞診検体を自分で検鏡し都度フィードバックを行い、臨床現場とのつながりをもつ立場として診断の場との懸け橋となりながら、しっかり細胞診の勉強を続けていきたいと思えます。ご指導の程よろしくお願い申し上げます。

2021年度細胞診専門医試験に合格し、晴れて細胞診専門医となりました牧嶋かれんと申します。私は2015年に鳥取大学を卒業し、同大学病院で二年間の初期研修を行ったのち、同院の病理診断科に所属し、2020年度に病理専門医となりました。入局時は新専門医制度への移行が予定されていながら、現場の猛反対により見送られた年でした。病理診断科は新制度移行のためのプログラムがしっかり組まれていたのに旧制度のままの専門医なのだろうかと思いきや、病理専門医試験合格後に貴方も新専門医制度に組み込まれるのであと一万円徴収しますという手紙が来て脱力いたしました。

病理医になることは学生時代から決めており、病理学講座にも時々顔を出して病理標本というものには多少は馴染んだつもりでございましたが、その時見ていたのは専ら組織標本で、細胞診は「組織標本はゆで卵で、細胞診は目玉焼き」「がん検診の検査項目の一つ」くらいのふわっとした認識でいて、正直なところよくわかっていませんでした。初めてきちんと細胞診標本を見たのは、初期研修で産婦人科を回っていたときの当直当番の待ち時間に、その時の当直の先生が医局から婦人科細胞診を出してくださったときでした。その時はベセスダ分類も知らなければ、そもそもこの標本に出ている細胞が何かもわからず、どう評価すればいいのかさっぱりわかりませんでした。一応病理医志望という謎のプライドもあり、ひたすら顕微鏡の前に座って何例も見続け、Googleでベセスダを調べてみたりもしましたが、よくわからないまま時間が過ぎ、ただただ難しいという感想で終わってしまいました。その時標本を出してくださった先生にも、「この人全くわかっていないぞ、病理医志望なのに大丈夫か」と思われたことでしょう。

結局細胞診診断のイメージがわからないまま、病理の後期研修が開始されたのですが、しばらくは細胞診といえば脳腫瘍の術中迅速で圧搾やスタンプを作って見るだけで（脳腫瘍は好きなので嬉々として見ていましたが）、諸事情により本格的に細胞診診断に関わり始めたのは後期研修開始から暫く経ってからでした。独特な雰囲気のカンファレンスで提示される細胞診の症例を見ながら、講習会やベテランの細胞検査士さんや教科書を頼りに勉強していきました。病理専門医の細胞診もなんとかクリアし、一年遅れて細胞診専門医を取得しました。試験会場では新型コロナウイルス感染予防のため、受験者を複数のグループに分けて、それぞれの開始時間をずらして行われました。私は30人程度のグループに振り分けられて、バーチャルスライドと筆記試験を受けましたが、病理専門医試験に比べてかなり和やかな雰囲気だったと記憶しています。

資格が増えれば仕事も増えるもので、専門医取得後は見る標本がドンと増え、悩ましいもの、組織と乖離があったもの、反省すべき結果となったものなど、奥深い症例にも多く出会い日々勉強させていただいています。組織標本といっても取れ方によっては細胞診との共通性があるので、病理医としては双方の評価をしっかり行い、互いに補完はするけど依存はしないような診断を心がけていきたいと思います。当院には頼りになる細胞検査士さんたちがいらっしゃるの、お互いに情報共有や意見交換を積極的にできるのがありがたい環境だと思っています。まだまだ一人で診断をほいほいと確定できるレベルに達していないため、相談先のある今のうちに積極的に経験を積み、精進して参りたいと思います。今後ともよろしく願い申し上げます。

私は病理診断を専らの仕事としている数少ない歯科医の一人です。歯科医における口腔病理医は、医者における病理医以上にマイノリティーな存在だと思われます。仕事に対する考え方は人それぞれではあると思いますが、私は歯科医師として病理診断という仕事に対して、日々やりがいを感じながら携われていることに、とても幸せなことだと感じています。そんな中、2011年に日本病理学会が認定する口腔病理専門医を取得し、この度日本臨床細胞学会が認定する細胞診専門歯科医を取得させていただきました。どちらも口腔を領域とした専門医ですが、口腔病理とはいっても、歯科の二大疾患である齲蝕症や歯周病などに関する病理診断を主に担当するわけではなく（むしろこれらを診断するにあたり病理診断は通常は行われず、このことも口腔病理医がマイノリティーである由縁の一つとと思っている）、主に歯科口腔外科医が専門とする口腔粘膜疾患、口腔領域の小唾液腺や顎下腺に生じる唾液腺疾患、歯源性疾患を含む顎骨病変などの診断を担当しています。しかし、口腔領域の疾患といっても、全身疾患の初期症状として口腔内病変がみられることや多臓器原発の癌が顎骨内に転移することもあるなど、一般病理ならびに全身疾患との関連を理解する必要性があり、資格取得のためには、病理専門医ならびに細胞診専門医試験と同じ知識と勉強が求められると思います。試験勉強に際しては、優れた専門書やテキスト・アトラスは、書籍としてまたは電子媒体としてたくさん存在していますが、実際の症例・標本を通して疾患について勉強する機会をもつことはとても大切です。しかし残念ながら、多くの歯科医にとってはその環境を確保することがなかなか簡単なことではないとの話も聞こえてきます。私は多くの方々のご理解とご協力のもとに、勉強する機会をつくっていただけたことに、とても感謝しております。月並みですが、専門医の資格を取得したからと言って、それがゴールなのではなく、あくまでも通過点に過ぎず、今後は資格に恥じないように、日々の研鑽を忘れずに、自分のスキルアップに努めていきたいと考えております。さらに今後同様に、口腔病理医や細胞診専門歯科医として、病理診断を自分のスペシャリティとして働きたいと考える歯科医の方がいらっしゃるようであれば、自分にできる形ではありますが、可能な限り、その希望が叶うためのお手伝いもできればとも考え

ております。

私が口腔病理医の道を志してから20年ほど経ちましたが、その間でも、口腔細胞診の世界は、どんどん変化、進展を遂げています。ご存知の通り、口腔細胞診が主に対象とする疾患は口腔粘膜疾患ですが、病変に対して直接・容易にアプローチできることから、細胞診をせずに組織を採取して診断を確定する場面も多くみられることも事実ですが、口腔粘膜疾患の中で、日本を含む世界的に罹患率や死亡率が増加しつつある、口腔（扁平上皮）癌に対し、口腔癌検診での早期発見や診断における細胞診の有用性が注目されています。その第一の理由は、液状化検体細胞診（Liquid-based cytology, LBC）法の採用だと思います。LBC法は、従来の擦過塗抹法に比べて、手技が簡単なために、口腔癌検診においても主な担い手となりうる細胞診に不慣れな開業歯科医の先生に有効であるだけでなく、診断をする病理医にとっても、細胞の塗抹面積が少ないために、検鏡の際の効率が良いなどの利点が多くみられます。さらに採取された細胞残液を用いて、特殊染色や免疫染色などの追加検討ができるというメリットもあります。第二の理由は、細胞診ガイドライン5 消化器（2015年版）にて、口腔細胞診の報告様式が、従来のPapanicolaou Class 分類に代わる口腔細胞診の判定区分およびその診断基準からなる新報告様式への変更が示されたことであると思います。細胞診の判定が臨床対応に反映されたことで、臨床での治療方針を決めるうえで、細胞診判定のウエイトが高くなったと思います。さらに今後はシングルセル（単一細胞）解析技術の発展に伴い、細胞1個からでも情報が得られるようになったことにより、免疫染色によるタンパク質発現に加えて、遺伝子発現の情報などにより、細胞の機能や性質が決められるなど、病理診断やゲノム医療において細胞診が果たす役割も益々重要になってくることが予想されます。私も時代の流れに取り残されないように、しっかり学ぶ努力を怠らないようにしていかなければならないと思っています。

最後になりますが、この度はこのような機会をいただきまして、細胞診専門医会会報編集委員長の森谷卓也先生をはじめ関係各位の皆様方に厚く御礼申し上げます。これからも変わらぬご指導ご鞭撻のほど、よろしく願い申し上げます。

2023年度細胞診専門医資格更新について

細胞診専門医委員会委員長 植田 政嗣

本年度は下記の方が対象となります。

2023年度細胞診専門医資格更新対象者ナンバー

594～683, 1006～1101, 1309～1386, 1588～1646,
1877～2028, 2367～2476, 2766～2849, 3138～3222,
3501～3612, 8035～8040, 8061～8074

平成25年度より学会の公益社団法人化とともに細胞診専門医資格更新制度が改革され、細胞診専門医会出席義務廃止、同専門医会、学術集会、研修指定講座、地域連携組織活動等への参加クレジット重視の方向性となっております。細胞診専門医の方は、今後とも学術集会（本法人ならびに関連学会）参加証等、各種出席証明を大切に保管していただけるようお願いします。

2020年より5年更新で新単位制度にて更新申請の為、「細胞診専門医資格更新実務に関する施行細則」をよくご確認ください。

詳細はイエローページやホームページ等で後日あらためてご案内いたします。

なお、長期海外出張、病気療養、出産・育児などのため資格更新に必要な業績単位を満たせなかった方は、上記の理由と期間を確認することのできる診断書、証明書、あるいは確認書などを添えて学会事務局に資格更新時に、申請書と共にご提出ください。細胞診専門医委員会は資格更新審査会にて、このような方を資格更新保留者と認定することができます。同時に保留（休止）期間を判定して本人に通知いたします。

なお、更新期間の延期・変更はありません。

2023年度細胞診専門医資格更新スケジュール（予定）

2023年11月中旬	更新対象者に更新案内送付
2023年12月10日	更新申請締め切り（必着） WEB申請で行う予定 (Webで出来ない方は案内がお手元に届き次第事務局へご相談ください)
2024年2月	資格更新審査会にて審査
2024年3月中	更新結果通知

2023年度細胞検査士資格更新申請について

細胞検査士資格更新審査委員会委員長 井上 健

2023年度は下記の方が対象となります。

2023年度細胞検査士資格更新対象者ナンバー
(ブルー・カード)

69～137, 273～363, 585～759, 1061～1146,
1558～1829, 2458～2692, 3458～3666, 4453～4725,
5350～5618, 6204～6369, 6944～7208, 7877～8158,
8870～9151, 9880～10149

①細胞診業務単位としては、以下のように規定されています。いずれも1年間に取得できる単位の上限は25単位です。

- a 常勤の場合 1年間に25単位
- b 非常勤の場合
 - 1) 週5～6日勤務の場合1年間に25単位
 - 2) 週3～4日勤務の場合1年間に20単位
 - 3) 週1～2日勤務の場合1年間に15単位

しかしながら、最近の社会情勢では雇用形態として常勤ポストが減少する傾向にあり、専任業務であっても“非常勤”として細胞診業務に従事されている場合があります。更新申請の際、“非常勤”の方であっても細胞診専任業務に従事されている場合は勤務状態を文書で申し出ただけであれば、この点を勘案して資格更新審査をいたします。ただし、資格更新に必要な所定の条件を満たしている方はこの限りではありません。

②長期海外出張、病気療養、出産・育児などのため資格更新に必要な所定の出席回数（日本臨床細胞学会学術集会春期大会・秋期大会、細胞検査士教育セミナー、細胞検査士ワークショップのいずれかに5年間に2回以上）と業務・業績な

どで規定の単位を満たせなかった方は、上記の理由と期間を確認することのできる診断書、証明書、あるいは確認書などを添えて学会事務局に申請してください。そのような書類が無い場合は、登録専門医、地域連携組織長あるいは所属長などと連名で事情説明書を提出してください。細胞検査士資格更新審査委員会はこのような方を資格更新保留者と認定することができます。なお、更新期間の延期・変更はありません。

新制度により、細胞検査士資格を更新できなかった方は、認定試験を2次試験から再受験できるようになりました。

ただし、日本臨床細胞学会をいったん退会された方は1次試験からの受験が必要です。

詳細については、学会事務局ホームページをご確認ください。

※自然災害等により更新に支障が発生した方は、その状況を記載して更新手続き願います。審査会にて審議・検討いたします。

2023年度細胞検査士更新スケジュール（予定）

2023年11月中旬	更新対象者に更新案内送付
2023年12月15日	更新申請締め切り（必着） WEB申請で行う予定 (Webで出来ない方は案内がお手元に届き次第事務局へご相談ください)
2024年2月	更新審査会にて審査
2024年3月中	更新結果送付 (新細胞検査士カード等一式)

日本臨床細胞学会 細胞診専門医会総会議事録

日 時：2022年6月12日（日）

午後3時40分～午後5時40分

場 所：第1会場（グランドプリンスホテル新高輪
国際館パミール3階 香雲）

会長挨拶：青木 大輔

A. 細胞診専門医セミナー（午後3時40分～午後4時40分）

演 題：「子宮頸がん検診—HPV検査導入に向けた課題と
将来展望」

演 者：藤井多久磨（藤田医科大学医学部 産婦人科学講
座）

B. 報告事項

1. 庶務担当報告（若狭朋子庶務担当総務）

下記の通り庶務報告がなされた。

日本臨床細胞学会全会員数：13,058名

（正会員5,749名 準会員7,064名 名誉会員39名
功労会員191名 図書会員15件）

細胞診専門医数：3,162名（実数）（認定：細胞診専門医
3,911名，細胞診専門歯科医113名）

FIAC：111名，MIAC：33名

細胞検査士数：8,073名（実数）（認定：10,942名）

CT（IAC）：3,789名

【物故会員】

●2021年5月26日～2021年10月25日までにご連絡のあ
った物故会員

《功労会員》

No.0086 桂 栄孝先生（京都病理研究会）
2020年2月8日ご逝去

《細胞診専門医》

No.0434 加藤 良樹先生（国家公務員共済組合連合会横
浜栄共済病院 婦人科）

2021年4月30日ご逝去

No.0475 林 逸郎先生（中津胃腸病院 検査科）

2021年8月18日ご逝去

No.1639 渡辺 次郎先生（独立行政法人国立病院機構福
山医療センター 臨床検査科）

2021年3月28日ご逝去

No.2157 米増 博俊先生 2021年7月2日ご逝去

No.2424 長嶋 和郎先生 2021年7月21日ご逝去

●2021年10月26日～2022年6月1日までにご連絡のあ
った物故会員

《功労会員》

No. 0275 佐藤 重美先生（公益財団法人青森県総合健診
センター）

2021年7月1日ご逝去

No. 0374 伊東 英樹先生 2020年4月2日ご逝去

《細胞診専門医》

No. 1807 藤吉 行雄先生（名古屋市立大学 臨床病態病理
学講座）

2021年12月25日ご逝去

No. 3692 長浜 真人先生（鈴鹿回生病院 病理科）

2022年2月7日ご逝去

黙禱

2. 事業報告（青木 大輔 会長）

下記の通り2021年度事業報告がなされた

- (1) 細胞診専門（歯科）医が業務を円滑に遂行できるよう支
援を行った。
- (2) 細胞診専門医による細胞検査士指導の実態を把握し調整
を行った。
- (3) 集会の開催1：専門医総会の開催6月6日（日）15:20～
17:20，ハイブリッドでの開催となった
- (4) 細胞診断の質を維持，向上させるための研修に関する事
業，以下の演題を細胞診専門医研修指定演題として認定
した。

・細胞診専門医セミナー・6月6日（日）15:20～17:20

「日本専門医機構と細胞診専門医制度」

座長 青木 大輔（慶應義塾大学医学部産婦人科学教室）

演者 植田 政嗣（畿央大学大学院健康科学研究科）

・医療安全セミナー・6月5日（土）15:40～16:40

「細胞診と医療の質・安全を考える」

座長 若狭 朋子（近畿大学奈良病院 病理診断科）

演者 小松 康宏（群馬大学大学院医学系研究科／医療
の質・安全学会）

・医療倫理セミナー・6月6日（日）10:50～11:50

「COVID-19時代”の科学と政治」

座長 井上 健（大阪市立総合医療センター 病理部・
病理診断科）

演者 神里 達博（千葉大学大学院国際学術研究院国際
教養学部）

・感染対策セミナー・6月6日（日）13:30～14:30

「日本の国際化のなかで感染症とどう対峙していくか
— COVID-19を例に」

座長 生水真紀夫（千葉大学大学院医学研究院生殖医
学）

演者 大曲 貴夫（国立国際医療研究センター 国際感染
症センター）

・医療安全セミナー・11月20日（土）17:00～18:00

「病理検査室における医療安全ISO15189の視点」

座長 藤井 多久磨（藤田医科大学 産婦人科）

演者 柳井 広之（岡山大学病院 病理診断科）

・感染対策セミナー・11月21日（日）08:30～09:30

「COVID-19流行期の検査室管理」

座長 横山 良仁 (弘前大学大学院医学研究科 産科婦人科学講座)

演者 北村 義浩 (日本医科大学)

・医療倫理セミナー・11月21日(日)10:00~11:00

「研究倫理と法規制~新しい医学系指針の解説~」

座長 伊藤 仁 (東海大学医学部付属病院 診療技術部 病理検査技術科)

演者 渡邊 達也 (北里大学医学部附属臨床研究センター 企画開発部門)

「病理検体を用いた観察・疫学研究の研究計画書作成と倫理審査」

座長 伊藤 仁 (東海大学医学部付属病院 診療技術部 病理検査技術科)

演者 古田 玲子 (北里大学 医療衛生学部 医療検査学科)

・細胞診専門医セミナー・11月21日(日)14:30~15:30

「がんゲノム医療時代における細胞診」

座長 青木 大輔 (慶應義塾大学医学部 産婦人科学教室)

演者 森井 英一 (大阪大学)

(5) 会報の発行 No. 57 を発行した。

(6) 細胞診専門医の社会的地位向上のための事業

・あり方委員会(岡本愛光 総務)の下に「新しいがん検診スタイルに適應した細胞診専門医あり方検討WG」を設置し細胞診の精度管理の指導を細胞診専門医の業務の一つとして位置付けることを議論した。

・日本専門医機構との情報収集を行った。

3. 会計担当報告 (井上 健 会計担当総務)

専門医会の決算および予算については学会の決算および予算の中に包括されている。これらについては日本臨床細胞学会の社員総会で承認されているため、今後専門医会では決算と予算については報告事項のみとさせていただきます。

4. 生涯教育担当報告 (森井 英一 生涯教育担当総務)

生涯教育として事業報告にあったように細胞診専門医研修指定演題を認定した。また専門医セミナーを企画している。

5. 細胞診専門医あり方委員会報告 (岡本 愛光 委員長)

細胞診専門医の育成を促進するための方策を検討した。婦人科については、関連他学会との共同事業を通じて育成を考えていく。また細胞診精度管理アドバイザーの普及に向けた制度化についても話し合った旨の報告があった。この点について、実際の検診事業にアドバイザーがどのように関わるのか、という質問があり、齋藤 豪総務より、この仕組みを公的検診や民間の検診にどのように認めさせるのが最も重要であり、そのためにはまず、このアドバイザー育成のためにきちんとした教育体制を構築していることが重要。学会としてもアドバイザーを強く対外的にアピールするようにしたい。また、学会員個々にも周知活動に参加して欲しいと考えている、という回答があった。また、三上芳喜理事より、精度管理については、さまざまな専門性をもったアドバイザーがアドバイザーボードを作って

必要に応じてアドバイスを与えるような仕組みが必要と考えるとの発言があった。国立がん研究センターの中山富雄氏よりがんセンターに検診に関するさまざまな情報が蓄積されているため、それらも積極的に利用してほしいとの発言があった。佐々木 寛氏より、婦人科がん検診学会の理事長、および人間ドック学会の理事としての意見として、職域検診を担当する医師がとても不足しており、それらの医師を紹介するための仕組みの中にこの制度を利用してインセンティブをつけることは可能なのではないかと考えている。また、婦人科がん検診学会では共同で検診事業に参画して欲しいと考えている旨の発言があった。

6. 専門医会会報編集委員会報告 (青木 大輔 専門医会会長)

第58号が発刊され、今回からカラー化されたことが報告された。

7. その他

・総務選挙の予定が報告された。

・経費節減のため、名簿発行について郵送を止めた方が良いという会員からの意見が寄せられた。総務会で検討した結果、学会の会員専用ページに掲載して欲しいとの要請を学会の情報処理委員会へ申し入れたことが報告された。

C. 日本臨床細胞学会側からの報告事項

1. 細胞診専門医委員会報告 (植田 政嗣 細胞診専門医委員会委員長)

・2022年度細胞診専門医試験予定および2021年度専門医資格更新について報告された。

・専門医資格更新中は専門医資格を認める旨、施行細則が変更されたことが報告された。

・精度管理アドバイザーについては今後制度の整備を担当することが報告された。

2. 細胞検査士委員会報告 (都築 豊徳 細胞検査士委員会委員長)

・2022年度細胞検査士試験の予定が報告された。

・2023年CT-IAC試験は実施予定であることが報告された。

3. その他

青木会長より2022年11月15日からボルチモアで行われる21st ICCが紹介された。

D. 協議事項

1. 2021年度細胞診専門医会決算案について (井上 健 会計担当総務)

2021年度の決算が報告され、全会一致で承認された。

2. 2022年度細胞診専門医会予算案について (井上 健 会計担当総務)

2022年度予算案が報告され、全会一致で承認された。

以上 文責 山下博

細胞診専門医会 総務・各種構成委員会メンバー

(任期：2023年4月1日～2025年3月31日)

会 長 青木 大輔

総 務 青木 大輔 井上 健 岡本 愛光 齋藤 豪 佐藤 之俊
藤井多久磨 松浦 祐介 森井 英一 森谷 卓也 若狭 朋子

○役割担当

庶 務

主 担 当 若狭 朋子
副 担 当 岡本 愛光
担当幹事 豊田 進司 西野 幸治 山下 博

生涯教育担当

主 担 当 森井 英一
副 担 当 藤井多久磨
担当幹事 三上 芳喜

会 計

主 担 当 井上 健
副 担 当 若狭 朋子
担当幹事 孝橋 賢一 中黒 匡人

細胞診専門医あり方委員会

主 担 当 齋藤 豪
副 担 当 佐藤 之俊
担当幹事 松浦 基樹

会報編集委員会

主 担 当 森谷 卓也
副 担 当 松浦 祐介
担当幹事 小塚 祐司

○各種委員会構成

細胞診専門医あり方委員会

委 員 長 齋藤 豪
副委員長 佐藤 之俊
委 員 有廣 光司 大橋 健一 近内 勝幸 村田 哲也 山下 博 横山 正俊
幹 事 松浦 基樹

会報編集委員会

委 員 長 森谷 卓也
副委員長 松浦 祐介
委 員 荒木 邦夫 大橋 隆治 齋藤 英子 藤原 寛行 湊 宏 村松 俊成
森谷 鈴子
幹 事 小塚 祐司

監 事 植田 政嗣

顧 問 長村 義之 加来 恒壽 覚道 健一 柏村 正道 亀井 敏昭 藏本 博行
越川 卓 坂本 穆彦 佐々木 寛 上坊 敏子 白石 泰三 土屋 眞一
東岩井 久 平井 康夫 安田 允 若狭 研一

細胞検査士指導要領

正しい細胞診断を行うために、細胞診専門医（以下専門医）と細胞検査士（以下検査士）とは共同して細胞診業務を遂行すべきである。専門医は検査士の要請に応じ、その検査士の登録細胞診専門医として学会に登録される^{*1}。

この場合、専門医はその検査士の教育・指導監督を行う義務がある^{*2}。

両者は常に信頼と協力のもとに密接な連絡体制を確立し、技術の向上とともに、よりの確な細胞診の実施をはからねばならない。

1. 指導の実際

1) 検査士と同時鏡検による対話的交流を行うことが最も効果的であるので、できるだけこのような機会を作るように努める。

2) 細胞標本の作成技術、細胞形態の鑑別や細胞学的診断について指導するのみでなく、臨床事項や他検査所見も含む総括的考察にも努め、細胞診の占める役割と意義についても正しく理解させる。

3) 細胞診の過小評価（見落とし、誤陰性など）および過大評価（誤陽性）はともに責任が大きいことを十分留意せしめる。専門医に連絡させる症例は各検査士の能力に応じて決定すべきであるが、原則として陰性以外はすべて専門医の判定を受けさせるべきである。これ以外の症例でも癌、非癌を問わず問題所見については、つとめて専門医に連絡させる。専門医は検査士の疑問症例の単なる相談相手としてのみではなく、その検査士のスクリーニングした全標本の判定結果に対して、道義的責任を有していることを十分認識しておかなければならない。

2. 他機関に対する専門医の立場

専門医が他機関の検査士を指導する場合は検査士の所属する施設の施設長と十分連絡し、次のいずれかの形式をとることが望まれる。

- 1) 専門医がその機関の非常勤医師になる。
- 2) 検査士所属の施設長より細胞診指導の依頼を受ける。
- 3) 検査士所属の施設長より当該検査士が指導を受けることについての了解を得る。とくに当該機関に認定病理医が所属している場合には、綿密な連絡が必要である。

専門医はさらに当該機関関係者に対しても細胞診の判定法、精度管理、検査伝票、設備、検査料金の設定など種々の面において助言勧告をすることが望ましい。

3. その他の注意事項

1) 診断を訂正する場合や診断に関連した臨床側とのトラブルの場合には、相互に連絡しあい標本を再検討するとともに専門医の責任において対策を講ずる。

2) 専門医を依頼された場合には、前述の責任と業務の遂行が可能であるか否かを考慮し、適当と判断した場合に引き受ける。

施設や地域の特殊性などを考慮に入れねばならないが、一般的には10名程度が指導できる限度とみなされ、これを越える場合には他の適当な専門医を紹介することが望ましい。

3) 必要に応じ、教育専門医として他の専門分野の専門医を紹介するなど、他の専門医との協力、さらには集団指導システムの導入などの検査士が全科的指導を受けられるような体制を考慮することが望ましい。

4) 学会や研修会への参加の奨励などにより検査士の能力の維持・向上に努め、細胞診標本の保管整理、検査伝票、設備、技術などの細胞診の合理的運営に必要な事項についても適宜助言する。

5) 細胞診に関する研究発表についても積極的に指導し、学問的批判に十分耐え得る内容のものを発表できるようにする。

6) 検査士の資格更新、転居、専門医更新に際しては学会の規定に従って的確に申請するように指導する。

^{*1} 細胞検査士の業務および資格更新に関する施行細則 2. 3)

^{*2} 細胞診専門医の資格認定、責務に関する施行細則 2. 3)4)5)

公益社団法人日本臨床細胞学会細胞診専門医会規約

第1章 総 則

(名 称)

第1条 この会は、公益社団法人日本臨床細胞学会細胞診専門医会と称する。

(事務所)

第2条 この会は、事務所を、東京都千代田区神田駿河台2-11-1 駿河台サンライズビル3階 日本臨床細胞学会事務所内に置く。

(目 的)

第3条 この会は、細胞診断実務に関する医師、歯科医師並びに技師の教育・指導に当たることを目的とする。

(事 業)

第4条 この会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1) 細胞診専門(歯科)医が業務を円滑に遂行できるように支援する。

以下、細胞診専門医は、特別の断りがない限り細胞診専門(歯科)医を意味する。

2) 細胞診専門医による細胞検査士指導の実態を把握し、調整する。

3) 集会の開催。

4) 会報の発行。

5) 本法人委員会等の要請により、委員を推薦する。

6) 諸問題を解決するため細胞検査士会と定期的に協議する

7) その他この会の目的を達成するために必要な事業。

第2章 会 員

(会員の構成)

第5条 この会は、本法人が認定した細胞診専門医で構成される。

(会員の移動)

第6条 会員は、退会又は転勤などの移転のあった場合、事務所に届け出なければならない。

第3章 役 員

(役員の種別)

第7条 この会に、会長1名及び総務若干名及び監事2名の役員を置く。

(会 長)

第8条 会長は、総務の互選により選出され、本法人理事長がこれを委嘱する。

2 会長は本会を主宰し、これを代表する。

3 会長の任期は2年とし、再選を妨げない。

(総 務)

第9条 総務は、細胞診専門医の中から会員の選挙により選出され、会務に関する重要事項を協議し実行する。

2 総務の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、選出時、被選出者は満65歳を超えないこととする。

(監 事)

第10条 監事は会長が候補者を推薦し細胞診専門医会総会の承認を経て決定される。

2 監事はこの会の会計及び会務を監査する。

3 任期は2年とし、再任を妨げない。

(幹 事)

第11条 この会の業務を処理するため必要な幹事を置く。

第4章 会 議

(細胞診専門医会総会)

第12条 細胞診専門医会総会は、日本臨床細胞学会春期大会時に開催する。

2 細胞診専門医会総会においては、以下の事項についての承認を求める。

1) 事業報告及び収支報告

2) 事業計画及び収支予算

3) その他運営に関する重要事項

3 総会の議事は、出席会員の過半数をもって決する。

4 会長は、総会開催時に、講演会等を行うことができる。

(細胞診専門医総務会)

第13条 この会は、日本臨床細胞学会春期大会及び秋期大会時に、細胞診専門医総務会を開催する。その他必要に応じて会長は臨時細胞診専門医総務会及び臨時細胞診専門医会総会を細胞診専門医会総務会の承認を経て開催することができる。

第5章 顧 問

(顧 問)

第14条 会長は、満65歳を超えた総務経験者のうち、細胞診専門医会に特に功績のあった者に対し顧問の称号

を与えることができる。顧問は、細胞診専門医会、細胞診専門医総務会へ出席できるものとする。

第6章 会 計

(事業計画・予算書)

第15条 この会の事業計画及びこれに伴う予算書は会長が作成し、毎会計年度開始前に細胞診専門医総務会で承認後、本法人理事会承認にて成立し、会計年度開始より3カ月以内に細胞診専門医会総会で承認する。

(事業報告・収支決算書)

第16条 この会の事業報告及び収支決算は、毎会計年度終了後、会長が事業報告書、収支決算書を作成し、細胞診専門医総務会で承認後、本法人理事会承認を受け、会計年度終了より3カ月以内に細胞診専門医会総会で承認する。

(会計年度)

第17条 この会の会計年度は、4月1日より翌年3月31日までとする。

第7章 細則の変更

(細則の変更)

第18条 この細則の変更は、細胞診専門医総務会の決定によって行われ、本法人理事会の承認及び細胞診専門医会総会の承認を経て発効する。

附 則

1. 当分の間、専門医会年会費2,000円、入会金2,000円、印鑑代1,000円を徴収する。
2. 年会費は、入会時及び更新時に5年分前納とする。
3. この施行細則は、公益法人の公益認定を受けた日から施行する。
4. 2013年(平成25年)6月2日 一部改定施行。
5. 2014年(平成26年)6月7日 一部改定施行。
6. 2018年(平成30年)3月10日 一部改定施行。

編集後記

専門医会会報59号をお届けいたします。今回もさまざまな人と人のつながりや、知られざるエピソード、総会報告や抱負、支部の状況、専門医受験にまつわるいろいろなお話などが記載されており、楽しく拝読させていただきました。ご寄稿いただきました諸先生方には心より御礼申し上げます。手に取ってすぐにお気づきになったことと思いますが、前回から会報がカラー印刷となっております。表紙の新しい(?)デザインは編集委員会内で選考中ではありますが、皆様方からのご意見が何かございましたら、ぜひ編集委員会までお寄せ下さい。

さて、今年の会報の編集後記で、日本医科大学の大橋先生が、ロシアのウクライナ侵攻のことを述べられていますが、残念ながら現在もその状況に終わりは見えず、民間人を含めた犠牲者の数が積み重なっていく状態は如何ともしがたい状況です。この会報が届く頃には少しでも外交面での進展があることを望むばかりです。我が国が戦争にない状況に感謝しつつ日々の診療に真摯に向き合っていくことが大切と感じると同時に、学術分野において国際的に貢献していくことで、世界とのつながりを強固にし、平和に寄与していくこともできると思います。細胞診の意義は遺伝子診療における役割を含め今後ますます高まるものと思います。佐藤理事長が述べられていますが、「がんゲノム診療における細胞診検体の取扱い指針」が、日本語に加え英語論文として発信されたということで、日本臨床細胞学会がこの領域においても今後世界の医療に貢献していくことが期待されます。また最近では、腫瘍のWHO分類においても組織分類のみでなく、肺および膵胆道系の細胞診リポーティングシステムがwebサイトに上梓され、日本からの意見が色濃く採用されたものとお聞きしております。今後も各臓器にわたりこのようリポーティングシステムが加わっていくことと思いますが、日本臨床細胞学会は今までの蓄積をもとに自信をもって貢献していくことと期待しております。近隣諸国とのつながりにおいては、若狭先生らがカンボジアとの医療交流のお話を引き続き書かれていますが、コロナ禍でのたいへんご苦労や工夫、さまざまな機関のご協力に頭が下がる思いです。カンボジアの先生方の熱意は医療や仕事に対する忘れがちな気持ちを今一度思い起こさせてくれます。

ウクライナ侵攻に関してはさておき、新型コロナウイルス感染症に関しては人々の行動様式がコロナ前の状況に徐々にもどりつつあるように感じます。5月に5類になることも決まり、今後対面での学会参加も増加すると思われます。春の名古屋、秋の福岡での学会で皆様とお会いできることを今から楽しみにしております。末筆となりますが、専門医会の皆様方のご健勝とご多幸をお祈りしております。

〔湊 宏〕

投稿原稿募集

細胞診専門医会会員の投稿を歓迎致します。
細胞診専門医や細胞診断に関する提言、細胞診専門医相互の親睦を深める内容であれば、随筆など細胞診断に関係のない内容でも結構です。

原稿送付先：〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台
2-11-1 駿河台サンライズビル3階
公益社団法人日本臨床細胞学会

細胞診専門医会会報編集委員会

委員長：森谷 卓也
副委員長：松浦 祐介
委員：荒木 邦夫、大橋 隆治、齋藤 英子、藤原 寛行、湊 宏、村松 俊成、
森谷 鈴子
幹事：小塚 祐司